

こころの学際研究、およびセンターでの取り組み

吉川左紀子（京都大学こころの未来研究センター長）

Sakiko YOSHIKAWA

はじめに

私の専門領域は認知心理学である。2007年にセンターに着任するまでは、主に顔の認知や表情認知についての実証研究を行っていた。センターができて思いがけずセンター長の役職に就いてからは、それまでの研究は連携研究プロジェクトの中で少しずつ継続しつつ、それと並行して3つの仕事を自分の課題にしてきた。ひとつは、「こころ」の学際研究を行うのに適した環境とは何かを考えること、ふたつめは、その環境を実現するために動くこと、第3には、その環境を開かれた研究の場にして、内外の交流を活発にすることである。

専門分野の異なる研究者が集まる研究組織は少なくないが、「こころの研究」を主題にした学際組織は、日本中を探してもほかに似たところはない。お手本に倣う、という楽な方法に頼ることはできないので、さまざまなアプローチを試しながら9年間歩んできた。私の研究総括としての本論考では、このユニークな研究の場をセンターのメンバーでどのように作ってきたのか、その道筋を簡単に振り返り、多様なアプローチによるこころの研究、教育、実践の総体として生まれる「こころ学」創生に向けてのスタートとしたい。

「里山」のイメージから始まる

心理学や脳科学など、心のはたらきの解明を目指す研究領域はいろいろあるが、私たちは人文社会科学も



図1 2007年7月に開催されたセンターの設立記念シンポジウム 右側より河合俊雄、カール・ベッカー、船橋新太郎、西平直、北山忍、長谷川真理子の各氏。司会は吉川が務めた

含めた学際性にこだわってきた。当初、神経生理学、認知心理学、臨床心理学、倫理学を専門とする4名の教授が集まったところからスタートしたのだが、さまざまな分野の研究者が集まる「里山のような研究の場をつくる」というのが、そのとき私が直感的に思い描いたイメージだった。里山には多様な植物が育ち、人と動物が暮らし、それぞれが相互に影響し合いながら全体として調和のとれた景観を作り出している。学際組織の理想郷としての里山のイメージは、センターの方向性を考えるときの指針として役立った。みんな違ってみんないい、という環境を作り、相互に連携して「こころ」についての新しい研究を生み出していく。細分化し専門化したこころの研究の現状を変え、社会に広がるこころの問題に対してさまざまな分野の専門家が協力し、問題の理解や解決に役立つ

提言や指針を発信する。そんな研究の場となることを目標に、センターはスタートした。

学際研究の場をつくる

私の専門は認知心理学であり、さらにその中では顔・表情認知の研究を長く行ってきた。しかし異分野の研究者が集まるセンターでは、認知心理学者というよりも、心理学者という立場で考えたり発言することが多くなった。心理学者の間ではよく知られていることだが、心理療法を専門とする臨床心理学者と、認知心理学などの実験系心理学者との間には、別の文化圏に属する人間といった趣があって相互の交流は少ない。そのため、心理学者の集団の中で議論するときには、お互いが何の（どの分野の）心理学の専門家であるかが重要な意味をもつ。しかし心理学

以外の人たちから見れば、(当たり前のことだが) 相手が何の心理学の専門家であっても、皆、心理学者である。そうした認識の違いも、学際研究の場に身をおいてはじめて気づいた。異なる文化圏で生活したときに感じるカルチャーショックに似た感覚である。

心理学に限らず、どの分野の専門家も、長年仕事をしていると、その分野の研究者に共通する価値観や考え方、行動規範、常識を身につけるようになる。人文社会科学系、自然科学系といった大まかなくくりではもちろんだが、それぞれの系の中でも、異なる分野の研究者が集まる学際的な組織がなかなかうまく機能しないのは、日常の仕事の中で働かせている「ここは重要だ」という感覚や判断基準が異なり、互いになかなか共有できないからではないかと思う。そうした日常感覚の共有部分が少ないと、お互いの仕事に関心をもって共感的に理解することもむずかしくなる。センターがスタートしたころにいちばん困難を感じたのは、自分の中にあるそうした「狭い専門意識」だった。学際研究の必要性や重要性は頭では理解していても、それをどのように実現したらいいのか、



図2 河合俊雄・鎌田東二『京都「癒しの道」案内』朝日新聞出版、2008年。京都の聖地をめぐるフィールドワークから生まれた本

幅広い「こころ」の研究を推進
脳科学からチベット仏教まで

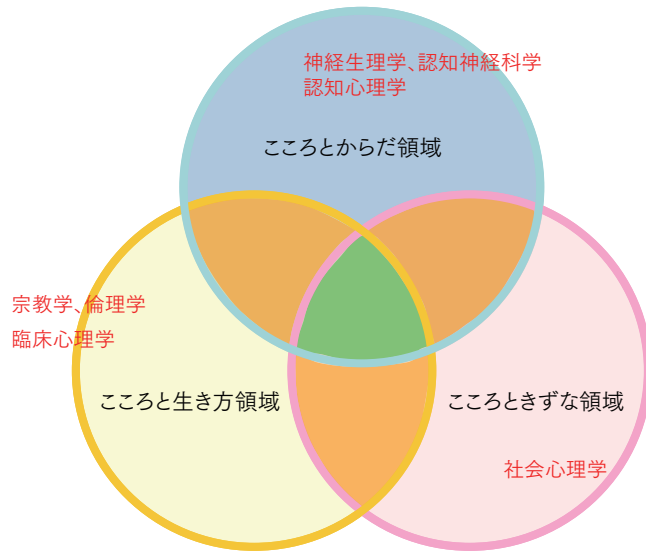


図3 京都大学こころの未来研究センターが取り組む3つの領域

具体的な方針がなかなか見えてこなかった。

私の転機になったのは、宗教学の鎌田東二先生、臨床心理学者の河合俊雄さんが行く、京都の聖地をめぐるフィールドワークに参加したことだった。この研究プロジェクトは、宗教学者と心理学者が京都の聖地めぐり、人間にとって聖地のもつ意味、意義をそれぞれの立場から考察し、意見交換を重ねて1冊の本にまとめるというもので、センターの学際研究プロジェクトのひとつである(図2参照)。わたしはこのフィールドワークに参加して、学際研究の場に欠かせないポイントを知ることができたように感じた。

それは人が集う「楽しさ」である。宗教学者と臨床心理学者が歩きながら自由に語り合う。それぞれが相手のコメントや発想に刺激を受け、自分の考えを発展させてゆく。そうしたやりとりの楽しさを味わうことが、また新しい発想につながってゆく。センターという新しい研究の場を、研究者同士が相互に親しく語り合う機会をもち、楽しく研究ができる場、風通しのよい場にすることができれば、きっとうまくいくに違いないと確信した。

研究者もひとりの人間である。異なる価値観、異なる関心、異なる経験を積んできた人間同士が、共に心地よく研究できる場とはどんな場なのか。それを考え、そうした組織を実現することは、ある意味で、心理学者が解こうと努力してもおかしくない「応用問題」である。この応用問題を解くことを自分の仕事と考えて、センター長職に取り組もうと考えた。

共通の枠組みをつくる
——からだ、きずな、生き方

学際組織では、研究者が全員で共有する枠組を作ることが大切である。こころを考えるうえで3つのキーワードを決めて、重なり合う3つの円で表現した(図3)。シンプルな図だが、研究者はそれぞれ、自分の研究テーマや関心に近い領域がみつかるように考えられているところがポイントである。

この3領域は、心理学の分野でいうと、「こころとからだ」は認知心理学や感情心理学、「こころときずな」は社会心理学、「こころと生き方」は臨床心理学の分野があてはまる。心理学以外の、もっと広い学問領域でも、この図式の中にもうまく配置する



図4 京都大学こころの未来研究センターの取り組み例
左: 支える人の学びの場「医療専門職のためのこころ塾」のチラシ
右: 孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発プロジェクト「くらしの学び庵」のようす

ことができる。たとえば、認知神経科学、脳科学は「こころとからだ」領域、宗教学や倫理学は「こころと生き方」領域である。3つの領域をただ並べるのではなく、重なり合う円にしたことで、それぞれの領域をつなぐ連携研究、学際研究をすすめている組織であることが伝えられると考えた。

では、この重なり合う3つの領域がつくる学際研究の場で何をするのか。センターがスタートしたのははじめのころは、全員で取り組む統一テーマを探そう、とかなり時間をかけて考えた。が、なかなかいいアイデアが浮かばない。そこで、「それぞれの研究者は、学際研究（異分野をつなぐ）という発想を重視しつつ、各自で自由に研究を計画し、実行する」というスタイルにして、現在までその方針で進んでいる。とはいえ、異分野の研究者が、日常的に親しく接することができる環境があると、研究者相互に有形無形の影響を受け合っている。当初は「違う分野のことに口出ししないし、あまり関心ももたない」という感覚であったのが、次第に情報交換や意見を言うことが

当たり前になってくる。

学際研究以外にもセンターでは「つなぐこと」をテーマにさまざまな取り組みを実施してきた。とくに、こころに関する研究成果を、そうした知識を必要としている人たちに伝える、という発想のもとで、「支える人のための教育プログラム」を構想し、作業療法士や理学療法士、特別支援教育の専門職の人たちを対象に、毎年、継続的に講義や実践報告の検討会を実施している（図4）。また、心理療法やプレイセラピーなどの実践活動を基礎研究とつなぎ、心理臨床の実践から浮かびあがる、現代の若者のこころにみられる特性についての研究プロジェクトもスタートした。発達障害の読み書き支援やコミュニケーション支援の実践からは、発達障害の子どもたちが示す日常での困りごとを分析し、その対処法についてエビデンスに基づく提案をする試みなどを進めている。

基礎研究の成果を、社会に広がるこころの問題の解法につながる形で効果的に発信する。そのためには、研究、教育、実践、発信の4つにバランスよく取り組む必要がある。一

般の人たちがセンターを訪れて相談する場を作ることも、センターの活動の一環として取り組んできた。異なる研究分野をつなぐだけでなく、基礎研究と実践をつなぎ、大学と社会をつなぐ仕組みである。こうしたそれぞれの「つなぐ」仕事は、センターの学際研究を支えている。

3つの研究プロジェクト

私がセンターで行ってきた研究プロジェクトについて簡単に紹介しておきたい。主なものは、(1) 他者理解に関わる感情・認知機能研究プロジェクト、(2) 臨床心理学と行動科学の学際研究として実施したカウンセリング対話の行動科学分析、(3) 発達障害の読み書き支援・コミュニケーション支援、である。

(1) の他者理解に関わる感情・認知機能プロジェクトは、私の専門領域である表情認知を扱っている。顔の表情が人物の印象を左右することは以前から知られていたが、この研究では2者間の関係性の判断（「どちらが支配的か」）にも人物の表情が大きく影響することを示した。心理実

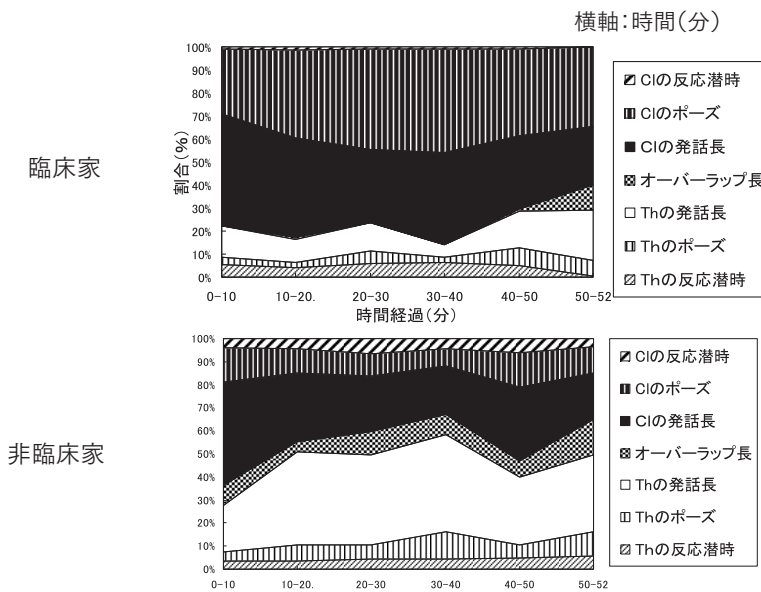


図5 臨床家(カウンセラー)と非臨床家の、対話の発言と沈黙時間の比較 臨床家では相談者(CI)の発話時間と沈黙時間が長く、非臨床家では聞き手(Th)側の発話時間が長い

験の結果、1人ずつの印象評価では笑顔がもっとも「弱い」表情であったのに対し、2者の関係性判断では笑顔がいちばん「強い」表情と判断された。対人関係を判断する際の笑顔のもつ意外な効果が興味深く、効果は頑健であることが分かり、今後さらに展開していこうと考えている(上田祥行助教との共同研究)。

(2) のプロジェクトは臨床心理学者、社会心理学者、認知心理学者が共同で研究に取り組み、異分野の心理学者の共同プロジェクトとして実施した。対話場面の映像を撮影して2者のインタラクションを発話時間や身体同調、瞬きなど複数の指標を使って分析し、熟達したカウンセラーの行う対話の特徴について明らかにした研究(図5、図6)で、成果報告とディスカッションを目的として日本心理学会においてワークショップを継続して行い、毎回多数の参加者を集めた。当時センター助教であった長岡千賀さん(現追手門学院大学准教授)が中心になり実施した研究である。

(3) のプロジェクトは、主に発達障害の子どもさんを対象にした療育を実施したもので、実践的な取り組みとしてセンター設置の早い時期か

ら継続してきた。現在、人間・環境学研究科の船曳康子准教授と数名のチームで研究をすすめている。

次のステップに向けて

こころの未来研究センターというユニークな研究の場で今後、さまざまなアプローチによる学際研究をさらに活性化する方策を考え、「こころ学創生」につなげてゆきたいと思う。私が以前から知りたいと考えているこころの特性に、「好きになるこ

と」と「成長すること」がある。前者は、古くからの心理学のテーマであり、認知心理学の分野でも単純接触効果(何度も知覚した対象はそれだけで好意が増す)など多くの研究が行われてきたが、まだよく分からないことが多い。人は、自分あまりよく知らない、なじみのない環境に置かれると、不安や不信が先行し、閉じこもることや敵対することで自分の安全を守ろうとする。初めて出会ったものやなじみのないものに、まず「好き」という感情、ポジティブな好奇心を向けることができれば、新しい環境に適応することが容易になるかもしれない。

「こころが成長する」というテーマも奥が深く謎が多い。身体の機能は年齢とともに低下するが、こころは高齢になっても成長することが可能である。個々人のこころの成長に加えて、組織の成長、集団としての成長、というテーマも今後重要になるだろう。「よりよい方向に変わってゆくこと」を成長と捉えれば、組織全体、集団全体の成長を促進する要因、阻害する要因を具体的に探っていくことができる。今後、こころ学の研究テーマとして取り上げてゆきたいと考えている。

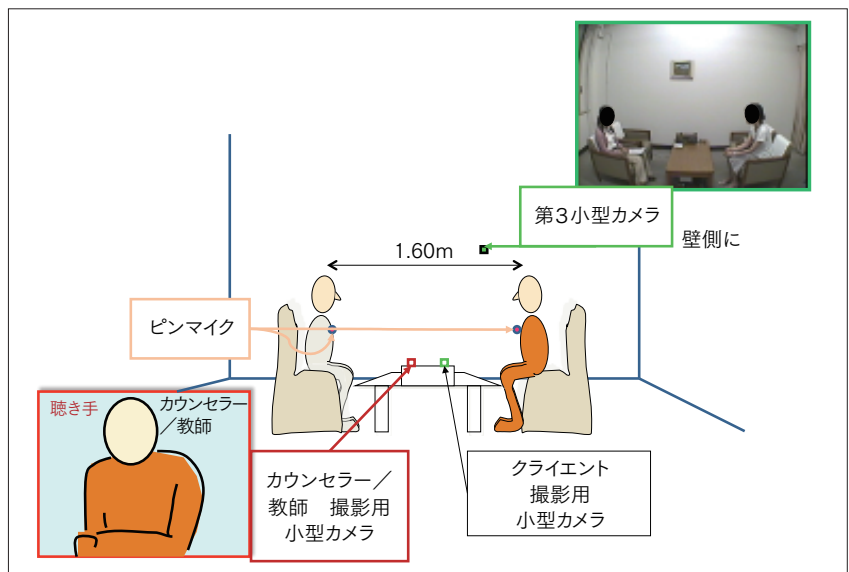


図6 対話の撮影状況 聞き手(カウンセラー・教師)と話し手(クライアント)が対面で座り、2人の上半身を撮影する小型カメラと全体を撮影するカメラが設置されている

人のこころを脳の働きで理解する

船橋新太郎 (京都大学こころの未来研究センター教授)

Shimaro FUNAHASHI

あなたのこころはどこにありますか？

「あなたのこころはどこにありますか？」と誰かに聞かれたらどこを指さすだろうか。胸のあたり？ それとも、頭？ 「こころは脳の働きによって生み出される」と理解していても、頭ではなく、胸のあたりを指さす人が多いのではないだろうか。若い女性にじっと見つめられると胸がドキドキするように、私たちのこころの変化に応じて心臓の拍動が変化することから、心臓の拍動の変化をこころの動きとして捉えることに不思議はない。「心」という漢字は心臓を表す象形文字から出来上がった、というのでも理解できる。しかし、このような場面で心臓の拍動を変化させた要因は何かと考えると、やはり脳の働きに行き着く。脳とこころは、切っても切れない関係にある。

平成23年3月に起こった東日本大震災後、テレビで放送された文章に、次のものがある。

「こころ」はだれにも見えないけれど、「こころづかい」は見える

繰り返し放送されたので、覚えている人も多いと思う。この文章は、宮澤章二という人の、『行為の意味』という詩の一文を改変したものである。「こころ」とはどういうものかを端的に表現していて、好きな文章である。私のこころは私にしかわからないし、他者のこころもその人にしかわからない。しかし、私の言葉や表情や動作などの行為を通して、はじめて私のこころが他者に見え、

理解できるようになる。同様に、他者の行為を見て、その人のこころが私に理解できるようになる。こころそのものを直接見ることはできないけれど、人の行為によって、その人のこころやこころの動きを知ることができる。では、言葉を発し、表情を変化させ、様々な行為を可能にしているのは何かと考えると、それは脳であり、他者の行為からこころが理解できるのも脳の働きに依っている。こころは脳の働きによって生まれ、脳の働きによって理解される、と言える。

こころのすみかを脳で探す

脳は単純な構造物ではない。複雑な構造をした脳のどこからこころが生まれるのだろうか。日本の脳研究のさきがけの1人である時実利彦が執筆した『脳の話』(岩波新書、1962年)は、「心のすみかを求めて」と題する章から始まる。こころのすみかを探し求めた古代ギリシャの哲学者の考察から始まり、中世に流行した精気やそれが充満するとする脳室への注目を経て、大脳皮質の重要性が認識され、大脳皮質の働きによってこころが生成されることが明らかにされる過程が説明される。

こころと脳の間を関係を考える上で、ガルが提唱した骨相学は、大脳皮質の重要性に人々が注意を向けるきっかけとなったことで重要である。骨相学の中心的な考え方は、大脳皮質が感覚・知覚や運動などの基本的な機能に加えて、芸術や数学などの知的な活動をも制御していること、そして、これらの働きは大脳皮質の異

なる部位で制御されていること(機能局在)であった。様々な機能の発現や制御に大脳皮質が重要であることや、それらの機能が大脳皮質に局在しているという考えは、現在の脳の理解に通じる。しかし、ガルが唱えた機能の局在に対しては猛烈な批判がなされた。しかしその後、ブローカによる言語野の発見、動物実験による運動野や感覚野の同定など、大脳皮質における感覚や運動機能の局在が次々に明らかにされ、19世紀の後半には大脳皮質における機能局在の考えが確立する。

動物実験や人の臨床研究により、四肢の運動に関わる運動野、感覚・知覚に関わる視覚野、聴覚野、体性感覚野などの局在が明らかにされてくると、記憶や判断や意思決定といったこころに直結する精神機能も大脳皮質のどこかに局在している、という考えが生まれる。これらの精神機能は特定の感覚や運動に関わるものではないことから、運動野や感覚野以外の大脳皮質の部位、すなわち、連合野と呼ばれる部位が注目されることになる。そして、連合野の中でも、額のすぐ後ろ側にあり、人の大脳皮質の3割という広い面積を占める前頭連合野が注目されることになった(図1)。

前頭連合野の損傷とこころの変化

前頭連合野は、人の大脳で最も広い領域を占め、霊長類の中でも最も大きく発達した部位である。誰の目にも、この部位が人の精神機能の発現に最重要な役割を果たしていることと映る。そこで、この部位こそ人に特

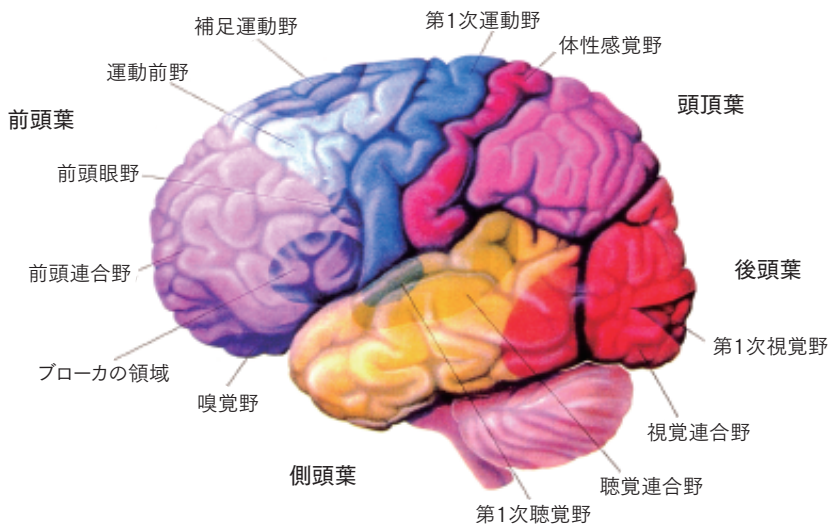


図1 大脳皮質における機能の局在

有な精神機能を担う部位であり、人がもつ知性の源であるとして、「知性の座」と考えられた。しかし、前頭連合野に損傷を負っても、感覚・知覚や運動はもちろん、記憶や言語や学習機能にも変化が見られず、一見したところ損傷前と何ら変わらないこと、動物の前頭連合野の実験的破壊でも、特に行動上の変化が見られないこと、動物の前頭連合野を電気刺激しても体のどこにも反応や変化が生じないし、様々な感覚刺激を呈示しても前頭連合野で特に反応や変化は生じなかった。そこで、前頭連合野は大脳皮質の大きな部位を占めるものの、機能的には意味のない部位として、「沈黙野」と呼ばれた。

前頭連合野は、一方で「知性の座」と呼ばれ、大脳皮質の中で最も重要な部位と考えられたが、他方で「沈黙野」と呼ばれ、機能的には意味のない部位と考えられた。「知性の座」なのか、「沈黙野」なのか。

このような状況の中で、重要な報告が19世紀の中頃にハーロウという医師によってなされた。それは、フィネアス・ゲージという人物に関する爆発事故の報告で、これによってゲージが被った脳の損傷や、それによる行為の変化については、アントニオ・ダマシオ著（田中三彦訳）『生存する脳』（講談社,2000年）に詳しく

記載されている。ゲージの例からわかったこととして、ダマシオは次のように記載している。

偶然にもゲージの例は、脳の中の何かが人間特有の性質、とりわけ、複雑な社会環境の中で将来を見据え、計画を立てる能力、自分と他人に対する責任感、自由意志のもとで自分の生き方を入念に練り上げる能力、などと明確に関係していることを示唆した。

そして、

将来の計画を立てる能力、それまでに学習した社会のルールにしたがって行動する能力、そして自己の生存に最も有利な行動を決定する能力。ゲージのそうした能力に傷をつけたのは、彼の脳の前頭連合野の選択的な損傷であった。

このように、前頭連合野は機能的には無意味な「沈黙野」ではなく、人が集団の中で目的をもってたくましく生きてゆくために必要な能力と密接に関わっていることが明らかにされた。

その後の研究により、この部位の損傷で、感覚や知覚能力、運動発現や制御、言語機能、長期記憶などには

特に障害がないものの、積極性がなくなる、無気力になる、周囲の出来事に無関心になる、計画性がなくなる、問題解決能力が低下する、不要な刺激に対する反応の抑制ができない、などの変化が生じることが報告された。いずれも行為の変化であるが、これらは感覚や運動などの基本的な機能の変化ではなく、ある目的を達成するために様々な機能を協調して働かせる仕組みに生じた変化、と捉えることができる。このような変化は、個性や性格の変化と総称して表現されるように、その人のこころの大きな変化として私たちに理解される。前頭連合野の損傷によって人のこころに大きな変化が生じることがわかる。

動物モデルで前頭連合野の働きを探る

前頭連合野が、積極性、計画性、問題解決能力、不要な刺激に対する反応の抑制などの機能に関わることが明らかになっているが、このような機能は前頭連合野のどのような仕組みによって実現されるのだろうか。その仕組みを知ることによって、こころに関わる脳の仕組みを理解することができる。しかし、脳の仕組みを知るためには、動物モデルによる研究が必要である。

動物モデルによる前頭連合野の研究は、1930年代のジェイコブセンとフルトンによる、遅延反応を用いた研究に始まる（図2）。遅延反応では、実験者が左右に設置した餌皿のどちらかに餌を置く行為を動物に見せた後、両方の餌皿を板などで覆って餌のある場所を隠す。その後、数秒から十数秒の待ち時間（遅延）を入れたあと、動物に餌のある場所を問う。餌のある方を動物が選べば餌を得られるが、そうでない方を選べばそのまま課題が終了する。餌を得るためには、餌の隠された場所の情報を遅延のあいだ保持し、その情報をもとに反応選択をしなければなら

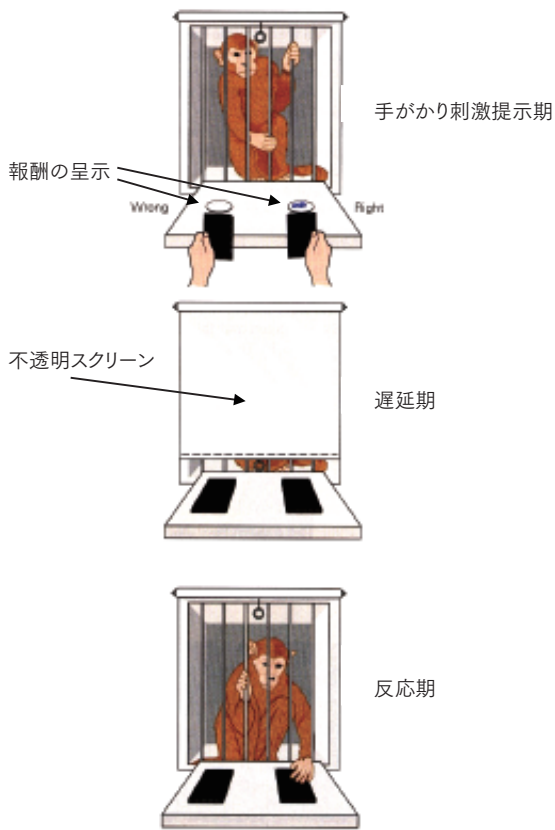


図2 サルを用いた遅延反応のようす

ない。彼らはサルにこの課題を学習させた後、脳の選択的破壊による成績の変化を検討した。その結果、前頭連合野の選択的破壊によってのみ遅延反応ができなくなり、その再学習もできなくなることを見出した。

この報告以後、多くの研究グループで遅延反応や遅延を含む課題（遅延見本合わせ課題など）を用いた動物実験が行われ、前頭連合野の選択的破壊により、刺激（報酬）呈示と反応選択との間に遅延が挿入された課題の遂行が特異的に障害されることが明らかにされた。これらの課題はいずれも、試行ごとに異なる刺激の情報を遅延のあいだ保持し、その情報を使って反応選択を行わなければならないことから、刺激の情報の短期的な記憶を必要とする課題である。前頭連合野の破壊により、課題の実行には影響がないが、各試行での正しい反応選択ができなくなってしまうことから、学習や訓練によって獲得された課題の実行に関する長期記憶は障害されないが、個々の試行に

必要な情報の短期記憶が障害されると解釈され、前頭連合野の機能として短期記憶が注目された。

一方、単一ニューロン活動の記録・解析による前頭連合野の機能研究は1970年代に始まり、遅延反応を使った研究により、遅延期間中に持続的に発火するニューロンが久保田、二木、フスターなどにより相次いで報告され、このような持続的なニューロン活動が短期的な情報の保持メカニズムであることが示唆された(図3)。

短期的な記憶機能が前頭連合野の重要な機能であるという考えを支持する結果が動物実験で繰り返し得られた一方で、人の臨床的研究では、これを支持する結果は得られなかった。動物実験の結果と、人の臨床研究の結果の食い違いをどう解釈するか。両者の結果を統一して説明できる概念、あるいは、キーワードは何か。これを探ることにより前頭連合野の機能を理解できると考えられた。このキーワードを提案したのがゴールドマン・ラキーチであり、それがワーキングメモリである。

ワーキングメモリを手がかりに前頭連合野の働きを調べる

ワーキングメモリは、「こころの黒板」とも称され、ある認知活動のために必要な情報を、数秒から数分程度の間、能動的に保持するシステムである。黒板に様々な文字や数字、あるいは図が描かれるように、ワーキングメモリには様々な情報が保持される。認知活動に必要な外的な情報、長期記憶から取り込んだ情報、あるいは、作業や情報処理の過程で生じた情報であり、いずれも認知活動に必要な情報である。さらに、必要な情報は活動の進行に伴って変化していく。そのため、黒板の文字や図が消されたり、新たに書き加えられたりするように、ワーキングメモリに保持されている情報は、必要に応じて処理され、置換や更新されていく。このように、ワーキングメモリとは、情報の一時的な保持機構と、置換や更新などの情報処理機構を合わせ持つシステムと考えることができる。

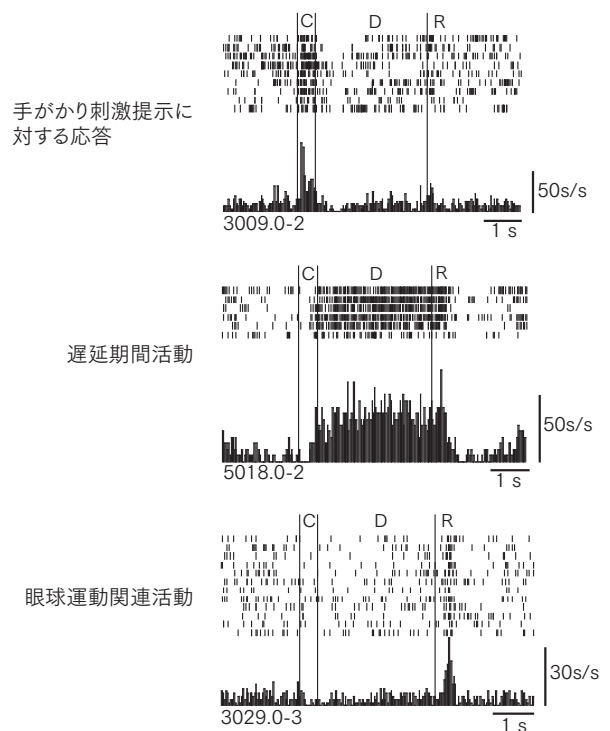


図3 遅延反応を行っているサルの前頭連合野から記録される3種類の典型的なニューロン活動

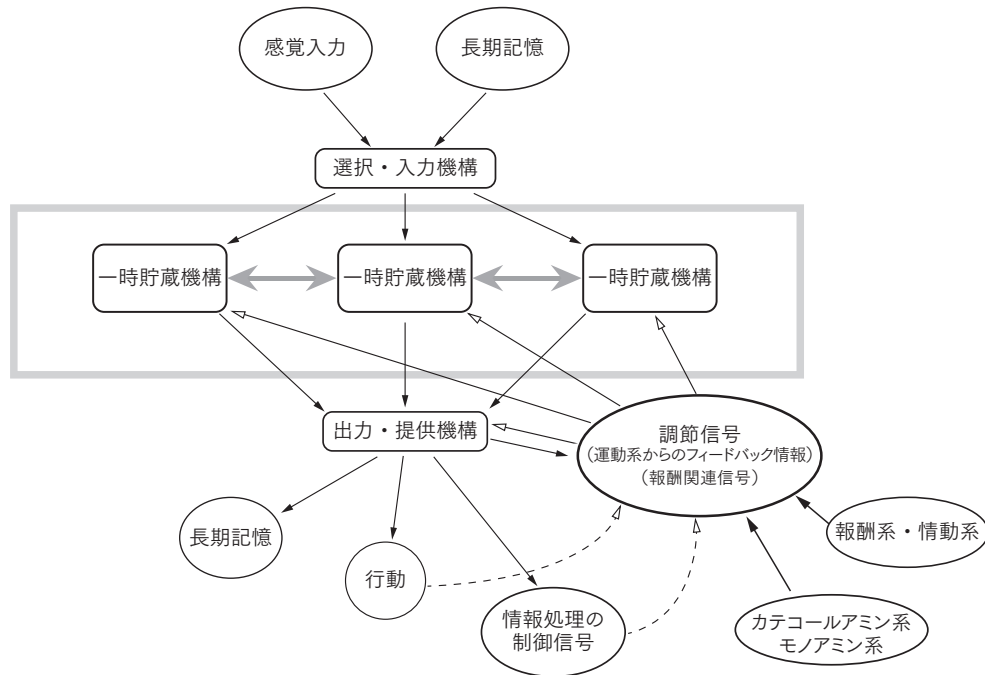


図4 ワーキングメモリに関わる前頭連合野の神経メカニズム

前頭連合野を破壊したサルで、刺激呈示と反応選択との間に遅延を入れた課題で顕著な障害がみられた。これらの課題の実行には、遅延のあいだ反応選択に必要な情報の保持が不可欠であることから、いずれもワーキングメモリを必要とする課題であると言える。同様に、私たちが、積極的に何かをする、周囲の出来事に関心を持ち続ける、計画的に行動をする、様々な問題を解決する時には、状況に応じた情報の保持や処理が不可欠であり、ワーキングメモリを必要とする。このように、ワーキングメモリの概念を用いると動物実験の結果と臨床研究の結果を統一して理解することができる。

1930年代に始まった動物を用いた神経心理学的研究の成果、1970年代に始まった動物を用いた神経生理学的研究の成果が、1980年代の後半に提案されたワーキングメモリの概念により人の神経心理学的研究の成果と統合され、1990年以降の前頭連合野とワーキングメモリに関する研究の爆発的増加を引き起こすことになっている。

私の研究グループでは、サルに記憶誘導性の眼球運動による遅延反応

を行わせ、ワーキングメモリに関わる前頭連合野の神経メカニズムを研究してきた。その結果、情報の一時的な保持は神経細胞の持続的な活動によって行われること、保持される情報の違いは持続的な活動をする神経細胞の違いによること、入力情報のような回顧的な情報に加え、出力情報のような先見的な情報も細胞の活動として保持されているが、前頭連合野では回顧的な情報を保持する神経細胞が大部分であること、入力情報から出力情報への情報処理は、神経細胞間の機能的な相互作用と、間脳の視床など、他の領域から入力される情報との相互作用によって行われていることなど、ワーキングメモリに関わる基本的な神経メカニズムを明らかにすることができた(図4)。

さらに、これらの知見をもとに、前頭連合野の関わる機能のメカニズム解明をめざして次のような研究を実施し、成果をあげてきた。

(1) どの選択肢を選んででも得られる結果が同じである条件での選択で、どのようなメカニズムが選択肢の決定に関わり、ワーキングメモリの神

経メカニズムがどのように関わるのかを解明する研究。

(2) 複数の認知課題を同時に実行しようとする、どれかの課題の実行が難しくなる(二重課題干渉と呼ばれる)が、この要因を解明する研究。

(3) 自身が記憶している内容やその精度を自身でモニターすることができる。このような働きは一般にメタ認知と呼ばれているが、その仕組みをワーキングメモリを用いて解明する研究。

人を対象にはできない侵襲的な研究を動物モデルで行うことにより、こころと結びついた様々な行為を生み出す脳内メカニズムを解明することができる。多くの研究によって明らかにされてきたように、ワーキングメモリを手がかりにすることにより、前頭連合野に関わる様々なこころの働きを理解することができる。期待される。人のこころの理解には動物を用いた脳の研究が不可欠である。動物を用いたさらなる研究により、人のこころの理解の進展が期待される。

ケア現場の「こころ学創生」

カール・ベッカー（京都大学こころの未来研究センター教授）

Carl Becker

はじめに

こころの未来研究センターの設立理念には、次のように書かれている——「地域の機関や企業等との連携を通して、本センターの研究・教育機能を地域社会の期待や要請に対応しうる形で充実させるとともに、研究成果を広く社会に還元することによって、こころについての科学的知識の普及を図る」。

つまり、こころの未来研究センターは、地域の機関と連携してこころを研究し、その研究成果を社会に還元しようとするセンターである。こころの働きを理解することは、机上・雲上の理屈ではなく、社会問題から出発して、社会を少しでも助けるための作業である。

筆者は長年、終末期医療に関する倫理や価値観を専門的に研究してきた。その最も重大な問題の1つは、介護者・看護師の不足と疲弊である。そこで、過去5年間、看護師や介護者のこころを対象に、地域の機関と連携して研究を進めてきたのである。看護師は職場のストレスによってなぜ倒れるのか。いかに立ち直れるのか。それを調べるために、(1)在宅介護暴力予防の研究や、(2)新人看護師の燃え尽き研究などを行っている。ここではそれぞれの簡単な紹介を通して、「こころ」について何が学べるかを考えてみよう。

(1) 介護者暴力予防プロジェクト

1970年頃までは、日本人の8割が在宅で死を迎えていた。ところが、

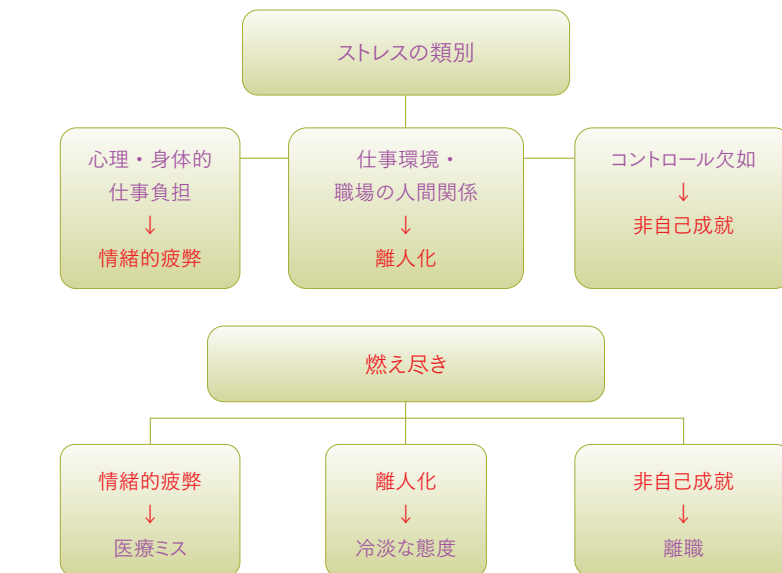


図1 ストレスと看護燃え尽きの構造(提供:天理医療大学 近藤恵氏)

バブル期に入ると、一気に核家族化が進んだ。それとともに、親の死期が近づくと、入院させられ、「死と闘う」ようになった。親の死を在宅で看取らなくなったのと同時に、「費用さえ賄えれば、専門家任せのほうが楽」という見方も広まった。80年代に、80%の在宅死は80%の病院死に転じたのである。

しかし、病院死は在宅死より非常に高い医療費を要する。さらに、高齢者人口がこれまで世界が経験したことがないほど増加すると、いくら病院のベッドを増やしたところで間に合わない。増税しない日本の財政では、すべての高齢者の死を病院で看取るのは不可能である。それを痛感した厚生労働省は、4年前の秋から、できる限り患者の末期は、病院ではなく在宅でケアするほうがよい、と方針を明確に変えたのである。

ただし、ケアするスペース・時間・場所・費用・人材・ノーハウ等がな

いという理由で、家族は「どうしたらいいか分からない」「死期が怖い」と戸惑い、在宅のターミナル・ケアを拒む一般人は少なくない。逆に全力を尽くすあまり、積極的にケアする家族が倒れてしまうというケースも現れている。

さらに問題となるのは、看護や介護を担っている家族が高齢患者に対して暴力を振るう惨事である。入院しなければ治らない患者を除いて、可能な限り入院させずに、在宅で看取りをするように、厚労省が方針を明記してから、毎年報告されるだけでも数千例もの高齢患者に対する家庭内暴力、数百例もの殺人に及び、在宅看護・介護が増えれば増えるほど、さらにこのような家庭内暴力が増える恐れがある。

暴力を受ける患者の多くは認知症が進んでいる女性高齢者で、暴力を加えるのは、その介護を担っている60歳以上の男性(夫もしくは息子)で

ある。一般論ではあるが、60歳以上の日本男性の多くが、それまでに炊事・掃除・洗濯などを経験してこなかった。また夫や息子である介護者は家事をやっても、認知症の妻から「美味しくない」とか「掃除や洗濯のやり方が違う」と批判されてしまう。かなり呆けたとしても、妻は何十年もやってきた掃除や洗濯法を忘れないし、美味しくないものは美味しくないと。だが、我慢して頑張っているつもりの夫・息子にとっては、批判されるのも癪に障る。もとより優しい話し合いもなければ、ましてや呆けている妻や母親に自分の感情を優しい言葉で伝える術は持っていない。腹が立って、ついつい妻や母を強く押し下したり叩いたりすると、患者は腰や頭を打撲・骨折し、大怪我で入院する羽目になる。このようなケースは欧米でも多いのだが、日本ではさらに急増すると危惧されている。まさに、「介護者のこころ」の問題と言わざるを得ない。

どうすれば、このような家庭内介護者暴力事件を減らせるのであろうか。すべての要介護者を抱える家庭に、ヘルパーや介護士を配置するほどの人材も経済的な余裕もない。もっとも、女性は男性に対して暴力を振るうケースは少ないし、男性が介護するケースは全体の3割くらいに過ぎない。さらに、暴力に転じる介護側男性は3%にも満たないので、家庭内暴力へと転ずる恐れのあるケースは、全体の在宅介護の1%以下である。その危険性のある男性を事前に特定し、彼らだけに特別な支援などを行えば、ほとんどの家庭内暴力は避けられると考えられる。では、そのもっとも起こりやすい男性の3%をどうやって事前に特定できるだろうか。

これまでに、要介護者の認知症の程度に比例して、介護者の不満や不安、怒りが増大し、暴力に転じやすいとの報告がある。また介護者自身は、睡眠不足になればなるほど、短

気になり、暴力に転じやすいとの報告もある。だが、その2つの要因だけでは、十分に事前特定はできない状況であった。何か別の要因が絡んでいるに違いない。

そこで筆者は、「介護者のこころ」が大事なのではないかと仮定し、介護者のやりがい感を含むSOC

(センス・オブ・コヒアレンス＝首尾一貫性感)を測れば、さらに理解できるのではないかと仮定した。SOCは、自分の日常や人生には意味があると思える感覚である。人生に意味を感じる人は、ストレスに対して強く、病気になりにくく、回復も早いという傾向にある。そこで介護ストレスについて、夜間起床回数だけでなく、「介護者のこころ」に対応するSOCも測るために調査を計画したのである。こうして、大阪、京都、島根などの福祉士の協力を得て、アンケート調査を実施した。その中で、要介護者の認知症レベルや、「介護のための夜間起床回数」はもちろん、介護者自身のSOCなどを測った。

177名のアンケート回答を得て分析したところ、SOCの関与が明らかとなった。確かに日本でも、介護のための夜間起床回数が多いと暴力は若干増える傾向にあり、あるいは、要介護患者の認知症レベルが上がるにつれて、ある程度暴力も増加する傾向にあった。しかし、それらの要因を圧倒的に超えて、断然強い関係にあったのは、SOCで測る「やりがい感」(有意味感)であった(表1)。

言われてみれば、これはごく当たり前の結論とも言えよう。つまり、介護者は妻や母親を愛し、介護に非常にやりがいを感じている場合、たとえ睡眠不足であっても、夜間に介護のために起こされても、あるいは妻や母親が認知症になっても、暴力

結果：SOCの影響は圧倒的！

従属変数：バーンアウト

	偏回帰係数	標準化係数	p
SOC得点	-0.037	-0.61	<0.001**
睡眠時間	-0.018	-0.06	0.34
夜間起床回数	0.091	0.15	0.02*
認知症診断の有無 (無=0,有=1)	-0.084	-0.15	0.01*

**p<0.01 *P<0.05
F値=37.58 (p<0.01)

表1 介護者の介護燃え尽きの要因(提供:京都看護大学 日吉和子氏)

までにはいわず、何とか介護を続けられる。逆に、やりがいや意味がまったく感じられず、「男の俺が、なぜこんなことをしなければならぬのか」という思いが強ければ強いほど、たとえ相手の認知症がひどくなくても、夜にそれほど起こされなくても、言葉にできない不満が怒りに転じ、ついに暴力として現れてしまうようになることも理解できる。

当たり前にも思われるこの研究成果は、暴力傾向を数値化して測定できるようになったという意味では非常に重要と思われる。つまり、どの介護者が暴力に転じやすいかをSOC測定で事前に診断と予測ができるわけである。極度にSOCが低い男性だけに注意を向け、彼らに対して適切な教育・レスパイト・支援などを行えば、ほとんどの家庭内暴力は避けられるのである。特に老人を病院や施設から在宅に移行させる際、主たる介護者のSOCを測ることにより、暴力の可能性を事前に推測・予防できるようになる。この研究結果を、国内外の介護関係の雑誌やメディアを通して、少しでも多くの介護者にご利用いただけるように努めたいと考えている。

(2)新人看護師の燃え尽き研究

①看護師燃え尽き対策プロジェクト

残念ながら、「燃え尽き」は単に男性の在宅介護者の問題とは限らな

い。全世界の中でも日本は類を見ないほどの高齢化が進み、まもなく人口の3割の人が65歳以上になる。高齢者が増えるにつれて、医療費とともに、看護師の数が不足しがちになる。だが、看護師は勤務後3年も経たない内に3割、5年以内に5割も離職する傾向にある。彼らに教育費を払ってきたのに、看護をしてもらえない国民にとっては大打撃であるだけでなく、看護師を目指し、数年も勉強して国家試験に合格し資格まで得た本人にとってももったいない話である。

日本人の看護師はすぐに辞めてしまうという問題について、浜松医科大学名誉教授の永田勝太郎氏は、複数のギャップが見え隠れしているという。1つは、ライフスタイルの問題である。看護を続けるためには、自分の健康管理が不可欠である。通常の病院勤務では学生時代のような夜更かしを続け、簡単な外食で間に合わせることもできて、ストレスの高い病棟勤務では、自分も病気で倒れそうになる。2つ目には、日本女性の多くは、身体イメージとして華奢でスマート（身体が細い）という理想像を持っているが、体重の重い患者を持ち上げたり、重労働の仕事をしたりするためには、体力と筋肉を付けなければならないので、理想像と違う身体が問題となってくる。さらに、看護職は頭を使わなくても身体で憶えれば何とかこなせる仕事だと考えて選んだが、体力と介護の腕が身についても、看護の仕事の中では、苦手とするコンピューターによる看護記録の入力や、時には高度な判断力も要求されるため、「こんなはずではなかった」と思って辞めてしまう者もいるそうである。

筋肉をつけることは嫌いという看護師も、筋肉のみを頼りにしていた看護師も、勤務が続かないという問題に加えて、看護は完璧主義の学生が目指す職業とは言えない時代となってきた。一昔前であれば、看護職

は教職と並び、女性にとって社会進出が許された数少ない開かれた職業であったため、優秀な日本女性も看護の道を選んだ。昭和の時代は、精密機器から看護にいたるまで、完璧を目指すことが全世界に誇る日本社会・日本思想の大前提であった。ところが、平成の時代に入ってから、日本の誇りとした完璧主義が次第に姿を消すようになった。

特に「ゆとり教育」という名の下で、学校教育では「学ばなくてよい」内容が大幅に増えたものの、患者のニーズや病院の勤務はそれに応じて容易になったわけではない。ゆとり教育は大失敗であり、それが撤回されてからも、完璧を考えず、いかに最低の努力で、必要最低限の点数で資格が取れるか、という発想で生きている若者は恐ろしいほど多くなっている。親は勉強を得意としない子どもに、「就職難の時代でも、看護師は不足している。おまえでも看護師くらいにはなれるだろう」と励まして慰める。看護学校等で60~70点取れば卒業単位がもらえ、国家試験の勉強に一時的に頑張れば、辛うじて80点くらいは取れる。しかし、「いかに完璧にできるか」ではなく、「いかに楽をして必要最低限で間に合うか」という生き方では、良い職人になれるわけがない。どこの企業でもそうだが、とくに病棟では人の命がかかっているのである。7割の正解で合格した学校と違い、病棟では3割もの処方箋を間違えたり、3割もの報告を怠ったり、3割もの患者を見捨てたりすることは許されない。これまでの人生で完璧を目指したことがほとんどない若者に、突然、完璧を求めても、対応できるものではない。

そこで、看護師長が指導的・教育的に叱ると、本人は「あの師長は私のことを嫌っている。だから私はあの師長が嫌い」と、幼い考えで勘違いする者もいれば、仕事の厳しさを悟り、「こんなに完璧を求める職場に

は、私は向いていない」と自己嫌悪に陥る新人もいる。とりあえずの対策としては、看護学校や看護大学などに対して、入学式の当時から、「看護師とは完璧を目指す職業である」と学生を教育し、完璧を目指す姿勢を少しでも早く身につけるための激励を送ることである。筆者も彼らに向けた教育講演や指導に際し、これらのことを心がけている。他方、7割しか目指さない新人看護師には、「不備な3割」に対する指導をすると同時に、「できた7割」に対する励まし方を現場の師長などに説明し、教育している。日本の看護師育成全体については、学校が「7割で合格」として卒業させてしまう現状のフォローや、卒業生の心理的ニーズや出来上がってしまった人格に応じて、さらに教育するほかに道はない。

燃え尽きの原因の研究については、3K（きつい、汚い、危険）の仕事であり、給料が安く、夜勤もあり、大変な仕事であるという理由がよく挙げられるが、離職率の高さは、同じように給料が安く、夜勤のある労働者には見うけられない現象である。また実験的には、給料を上げたり夜勤を減らしたりしても、辞める人は辞める、という報告もある。その燃え尽きや高離職率の裏には、こころの問題も潜んでいるに違いないと、筆者は考えた。

そこで、看護師職着任から1、2年の内に、とくにどの時点でストレスが高まり、どこで不満や不安、フラストレーションを感じるかを測るために、関西の千人以上の新人看護師を対象としたアンケート調査を実施した。すでに長年にわたって看護の教育やSOC調査に関わってこられた大阪医科大学教授の赤澤千春氏と看護研究会の仲間とで尺度を選定し、調査紙を作成した。調査内容としては、SOC調査を始め、Maslachのバーンアウト尺度、旧労働省の職業性ストレス尺度など、合計80項目ほどの調査になった。まず看護研究会の

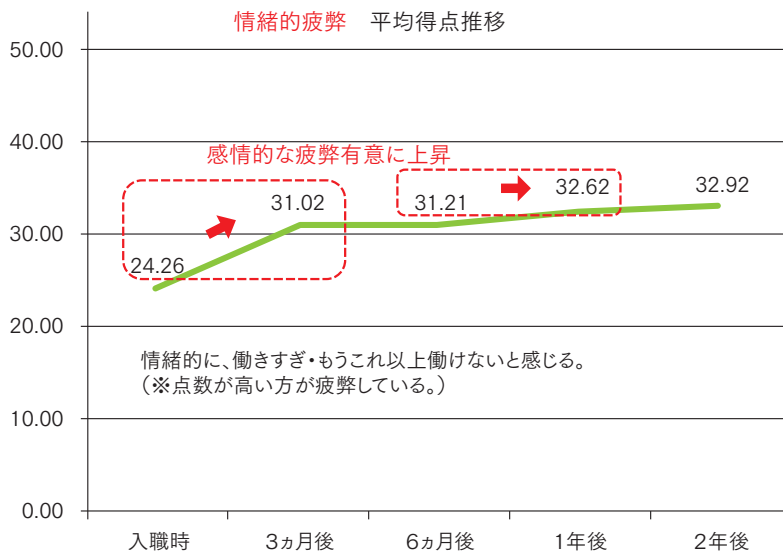


図2 新人看護師の情緒的疲労の推移(提供:椋山女学園大学 中嶋文子氏)

看護師の勤務する病院に予備調査を行い、質問紙を修正した後、関西2府4県の病院に協力を依頼した。126の病院から協力を得られ、千名を超える新看護師の協力により、1年間を通じて4回の詳細な調査をすることができた。

看護師職着任時と、3ヵ月研修、6ヵ月研修、1年研修時で回答を行い、さらには2年目、3年目の調査も実施した。膨大なアンケート回答を依頼したことと、看護師自身の配属変更や病院移動などから、最初は1,200名近くが回答してくれたのに対し、3年にわたって毎回欠損なく答えてくれたのは、その3分の1であった。それでも、燃え尽きについて、これだけ大人数の数年にわたる看護師調査は世界的に極めて珍しい。また6回×平均600名以上×80以上の項目を扱うため、約30万点のデータ入力と分析となり、大変な解析作業になっている。現時点では不完全な分析とは言え、大事な新発見がたくさんあった。その一部を以下に紹介したい。

驚くなかれ、最も大きな数値的变化は、着任した時から最初の3ヵ月までの「リアリティ・ショック」の時期である。着任して3ヵ月の間は、いわゆる「第一印象」の影響がとても大きい。実に多忙になり、燃え尽きやすくなるのは、半年後～1年後で

ある。何割かの新人看護師は、着任してすぐの時に、「職場は合わない、仲間に頼れない」という印象を受けてしまう。すると、半年後～1年後に、師長がその新人の苦しんでいる様子に気付いて、プラスαの支援や配慮を加えても、潜在的に「合わない、頼れない」と思ってしまった新人には遅く、結局辞めてしまう。逆に、最初の数週間の中に、「これは私に合う職場、頼りになる仲間」という印象を受けると、後で多忙になっても、何とか続けていける傾向にあることが分かってきた。つまり、最初の数ヵ月(長目の第一印象)が極めて重要であるので、それが最も改善すべき点の1つであろう(図2)。

また、燃え尽きない新人と燃え尽きやすい新人の差の1つは、話し相手がいるかどうかであった。看護師になる前、看護大学生の最も多い話し相手は家族であった。しかし、それが数ヵ月の内に変ってしまう傾向にある。人によっては独居が始まり、また家族と一緒に住んでいても、親兄弟は看護の細かい話には乗ってこない。その時期に、気軽に相談できる先輩や仲間が職場にできると、様々な看護ストレスに対しても対応できるのだが、そういう仲間ができないと、あらゆるストレスを孤独に抱え、燃え尽きやすくなるので

ある。制度上、多くの病院は新人を指導する先輩とベアを組むプリセプター制度などを導入しているが、それは形式で終わってしまうのか、信頼できる相談相手になるかで、燃え尽きの度合いはかなり違ってくる。また「あの先輩のようになりたい」という理想像が持てる人は、「こんな人たちのようになりたくない」と思う人よりずっと強く生き残られるのだという。

②研修教育改善

それらの結果を考慮して、定期的集まっている関西圏の看護師長などの協力を得て、新人看護師の研修会では、彼らのSOCを高めるための試みを始めている。新人看護師のSOCが下がるのは、自分の置かれている状況を把握しきれていない、処理しきれていない、あるいは十分なやりがい感を感じていない、ということである。それに対して、3ヵ月、6ヵ月などの研修会で、これまでの訓練や確認に加えて、例えば「何がわかるようになってきているのか」(把握可能感)、「どのような能力を身につけてきているのか」(処理可能感)、「自分がどのように成長しているのか」「誰のお役に立っているのか」(有意味感)などに関する自己評価を指導している。自分の状況をより客観的に把握し、大変な仕事であっても、自分が成長し、人の役に立っている、と気づくことにより、やりがい感であるSOCが高まるはずである。SOCは燃え尽きを予防する働きがあるので、SOCの言語化や意識化を鮮明に引き出すことによって、燃え尽きを事前に予防できるのではないかと考えている。

介護者や看護師は、高齢社会にはますます重要な役割を果たす職種である。介護者や看護師のこころを理解し、支えることができるなら、「こころ学」の実用的成果は間違いなしと期待して止まない。

近代意識の過去と未来とその周辺

河合俊雄 (京都大学こころの未来研究センター教授)

Toshio KAWAI

1 臨床心理学による方法論と対象

筆者の専門分野は臨床心理学であり、心の悩みを持った人の相談を受けることを主な活動としている。したがって、一般的な人を調査・実験するよりは、悩みや病を持つ人という特殊なものからこころにアプローチする方法を取っている。すると研究としては一般から偏ってしまうリスクがあるが、逆に人のこころは普通ではない追い込まれた状況でないとはわからなかったり、また特殊なことから本質が見えたりするので方法論的な利点もあると考えられる。それは、宗教が修行などで自分を追い込むことからこころを変容させたり、またそれをもとにしたこころ観や世界観を提供したりするのと似ている。

筆者がこころの未来研究センターで対象としてきた問題は、主に発達障害、身体疾患とこころの関係、それに震災のこころのケアである。これは従来の心理療法の対象となっている、「神経症」と言われるような典型的なこころの問題や悩みからははずれている。心理療法自体が特殊なものや周囲のものを扱うということを指摘したが、その中でも特殊なものや周囲のものを扱っていることになるかもしれない。しかし発達障害は近年において増加していて、心理療法にとって大きな課題になっている。また自主的に訪れてくる人に相談室などで会うという従来の方法よりも、病院、災害現場などにカウンセラーが派遣され、これまでにないこころの問題に直面することが増えている。そのような意味で研究対象として取り上げ

たものは、現在の社会情勢やこころのあり方の変化に対応していると言える。

従来の心理療法が、個人の主体性と内面を持つ近代意識を前提とした症状を主な対象としていたことから、ここでの研究対象は近代意識の周辺であったり、あるいはその後を訪れつつある未来のものであったりする。さらにそれは近代意識成立以前のこころはどのようなあり方をしていたかという問いにもつながるのである。

2 発達障害の研究プロジェクト

心理療法の対象は、時代や社会の変化や要請に従って変化していく。2000年以降に日本で増えている症状は発達障害である。今の心理療法に求められている要請に応え、またそこから現代のこころのあり方を検討するという意味もあって、われわれは発達障害の研究プロジェクトを立ち上げて取り組んできた。

このプロジェクトは、事例検討の積み重ねと調査研究から主に成り立っている。カナー(1943)とアスペルガー(1944)が独立に発見した自閉症は、それぞれ異なる疾病群とも考えられていたが、ウィングが「自閉症スペクトラム障害」として統一的に捉えることを提唱した。最早期に発症し、言語が話せなかったり、対人関係が持てなかつたりするので、最初は母子関係の問題が疑われ、それに焦点を当てた心理療法が試みられていた。しかし後に情緒面よりも認知的側面の問題が目目されるようになり、中枢神経系の障害として捉

えるのが定説となっている。それにとともに、発達障害については、心理療法の効果が薄いと考えられ、療育や訓練が中心的な取り組み方となっている。

しかし発達障害への心理療法の成功例も多くある。そこでこの研究プロジェクトでは、まず発達障害への心理療法の成功例をいくつか検討することから、発達障害への心理療法的アプローチのエッセンスを抽出しようとした。

その成果は、多くの論文と、『発達障害への心理療法的アプローチ』と『大人の発達障害の見立てと心理療法』(図1、2)という2冊の著書、および畑中千紘助教による『話の聴き方からみた軽度発達障害』に示されている。この研究を通じて浮かび上がってきたのは、発達障害を捉えるポイントとしての「主体」という概念である。発達障害の人の中核的な特徴は「主体」が希薄なことと考えられるので、心理療法においても主体を確立させることが最も重要なことになる。

主体という概念を適用することで、発達障害における様々な特徴が理解できる。たとえば「同一態の保持」と言われる行動がある。それはスピニングと呼ばれるような、独特の手の動きであったり、ぐるぐると回り続けたりする行動であったりする。それらは単なる奇妙な行動ではなく、発達障害の人の主体がない、あるいは主体が弱いために、その代わりとなる確かなものを保持しようとしていると考えられる。

言語に関しても、主客が分離することによる主体の成立がその条件と



図1 河合俊雄編『発達障害への心理療法的アプローチ』(創元社, 2010年)

なっている。自他の分離していない世界において、言語によって間接的に表現する必要はない。また言語は差異性を生んだり、それを前提とするものなので、自分どもの、あるいは世界の中に分離があることが言語の成立にとって必要な条件である。

心理療法は、近代主体の確立とともに成立してきて、そもそも主体的に治療に訪れてくるクライアントを前提にしている。また精神分析の「自由連想法」をはじめとして、セラピストが忠告や援助をするのではなく、あくまでもクライアントが主体的に問題を解決していくのが心理療法の方法である。しかしクライアントの主体性が弱い場合にこの方法は困難になり、そのため、発達障害に心理療法が有効でないとされてきたと考えられる。

すると発達障害への心理療法においては、クライアントの主体を前提とした従来の心理療法とは異なって、主体を作り出していくようなアプローチが必要となってくる。それには一度融合した状態を作り出してから、そこからの分離によって主体が生まれてくることが求められる。重症の場合には、まずセラピストとクライアントがつながったり、ある



図2 河合俊雄・田中康裕編『大人の発達障害の見立てと心理療法』(創元社, 2013年)

いはプレイセラピーでいろいろな形で渾沌としたものを作り出したりして融合を生み出す必要があるが、軽症の場合には、融合を前提として、分離が治療上の大切なポイントになる。そのような融合と分離は、クライアントとセラピストとの関係で生じたり、プレイセラピーにおける遊びの表現で生じたりする。家族との関係でも、母親から別れてプレイセラピーの部屋に入ることに何の躊躇もなかった子どもが、セラピーのあいだ母親から分離していることによって、数回のセッションの後に母親からの分離不安が生じてくるという形ではじめて母親との関係が生まれることもしばしばある。

主体の生じ方として、母親と分離することではじめて関係が生まれたように、当初は融合からの分離に注目していた。その後、主体の成立の仕方として、分離の他に「発生」が重要であることに気づいた。それはプレイセラピーの中では、垂直的なものが立ち上がったり、何かが吹き出したりすることで表現される(図3)。

3 こころ・意識の変化

発達障害が増えている背景には、

こころの時代的な変化があると考えられるので、研究プロジェクト「こころの古層と現代の意識」などによって、現代のこころのあり方や心理療法でのこころの動きについての歴史的なモデルを検討した。日本での代表的な心理的な症状は、大きく変化してきている。心理療法が対象とする主な症状は、フロイトが取り上げたヒステリーなどの神経症であった。日本での典型的な神経症は「対人恐怖」で、これは親しい人や見知らぬ人に対しては問題がなくて、少し知っている程度の近所の人やクラスメイトなどに不安を感じる症状であった。ところが対人恐怖は減少していき、1980年代には「境界例」が増え、1990年代には、解離性障害が目立った症状になってくる。そして2000年以降に増加しているのが発達障害である。

多くの神経症は、主体が成立することによって生じる。思春期になってから追いかける悪夢を見るようになることが多いように、自分の存在を自覚するから不安が生じる。したがって、心理療法も主体にアプローチすることになるし、またそれを自己関係として捉える。

ところが発達障害にはこのような主体や自己関係を前提にしたモデルが通用しない。心理療法を通じて、そもそも主体を生み出すように取り組むことになる。こころの歴史を検討してみると、心理療法とその対象となる症状は、近代意識とともに成立してきたことがわかる。それに対して主体の明瞭でない発達障害においては、近代主体成立以前の前近代のこころのあり方や、さらには近代主体以後のポストモダン的なあり方を探ることが参考になると思われる。

そのために独自の研究を行うだけでなく、様々な共同研究を行ってきた。その中で、発達障害の心理療法で認められたような主体の成立には、様々な歴史的なモデルが参考に



a



b

図3 大久保もえこの事例

a 初回に、子どもはピンを連ねる。分離のない世界。

b ピンが立ち、分離される……言葉がはっきりしてくる。

(河合俊雄編『ユング派心理療法』ミネルヴァ書房, 2013年)

なることがわかった。たとえば柳田國男の『遠野物語』では、主人公が異界から宝などを村や町に持ち帰るような典型的な昔話のモチーフは描かれていない。むしろ動物、神さま、外国人など様々な形で現れてくる異質の他者との遭遇が描かれていることがわかる。たとえば、第3話では、山に猟に出た男が、大きな女性を見かけて、いきなり銃で撃ち殺してしまう。そこには昔話らしい誘惑、逃走、結婚などのモチーフが一切認められない。これは村と山という異界との接点での出会いと、それによる境界や意識の成立が描かれているように思われる(河合俊雄・赤坂憲雄編『遠野物語：遭遇と鎮魂』岩波書店, 2014年)。分離やぶつかることによって主体が生まれてくる発達障害の心理療法の世界との共通性も感じられる。

主体の発生は、河合隼雄が宇治拾遺物語で検討したような受動性からの転換や、華嚴仏教での無から立ち上がってくる性起のあり方に認められた。このように前近代的なころのあり方を検討することは、現代の心理療法から浮かび上がってくるころのあり方や変容の仕方とつき合わせることで、ころの本質についての研究を深めてくれると思

われる。その意味で「近代意識の過去」についての研究は大切なのである。またそれとは逆に、拙著『村上春樹の「物語」——夢テキストとして読み解く』(新潮社, 2011年)のように、ポストモダン的なあり方についての検討も行った。

4 発達障害についての調査研究

事例研究の積み重ねからエッセンスを抽出されたころのあり方を、他の人文科学との関連で前近代やポストモダンのころのあり方として検討することに加えて、それらの成果を自然科学的な調査モデルによって実証する試みも行っている。

発達障害の心理療法については、プレイセラピーを実施して、その前後の心理検査を比較して検討している。まだパイロットスタディの段階であるけれども、発達障害と診断されている子どもにプレイセラピーを実施すると、発達指数が向上したり、認知面と言語面での差異、あるいは下位項目でのバラツキが少なくなったりすることがある。また、発達検査における変化と、プレイセラピーにおける変化には対応関係が認められた。主体性ができてくることによって、発達検査における数値も改善

することが認められた。

発達障害が社会的にも注目されるのにもなって、発達障害という疑いでこの調査に参加した子ども、それどころか発達障害という診断や判定をもらって来た子どもに、発達障害とは認められないと考えられる事例が増えてきている。それらがなぜ発達障害とラベルづけされるのか、またプレイセラピーによってどう変化するのかについても検討を進めている。発達障害という診断が増えていよう、これは現代のころのあり方に関わっている。

発達障害における主体の弱さは、選択を困難にさせる。これを畑中千紘はロールシャッハを用いて研究した。畑中は、大人の発達障害のクライアントにおいて、「不確定反応」がしばしば生じることに着目した。これは、「何かの動物」のように答え、何の動物であるかを確定させなかったり、「猫、虎かな、やっぱり犬」などのように、次々と反応を変えていたりするものである。これは通常生じない反応と考えられており、自分の反応を主体的に選べないことに起因していると考えられる。調査によると、対照群、神経症群よりも、発達障害群が有意に多く不確定反応を示した。

さらに2003年と2013年の大学生を比較してみると、10年前よりも「不確定反応」が有意に増えていることがわかり、発達障害的な心性や主体性の弱さが浸透してきていると考えられた。これはこころの時代的变化を示すデータとして重要である。

5 支援としての心理療法：身体疾患と震災

心理療法は、自主的に訪れてくる人に対して行われ、またセラピストが指示や忠告をするのではなく、クライアントが自分で主体的に問題と向き合って解決するように、主体性が大切である。

近年において、伝統的な心理療法のあり方が変化してきて、アウトリーチとしての心理療法が増えている。学校にカウンセラーが派遣されていて、その場で料金を支払わずに心理療法をサービスとして受けられるというのはその代表的なあり方である。

医療での心理療法は、精神科だけではなく、心理的な側面が大切と考えられている内分泌疾患、アレルギー疾患など様々な身体疾患で広がっており、さらには医療の進歩に伴い、ターミナルケア、遺伝カウンセリングなどまで及んでいる。また司法の領域でも、被害者支援、逆に受刑者に対するカウンセリングサービスも行われている。そして東日本大震災をはじめとして、災害や事故に際して、心理療法家が派遣されることも多い。

このような社会情勢の変化を受けて、身体疾患の人の心理と心理療法についての研究を行った。また2011年に東日本大震災が起こったことにより、震災後のこころのケアに継続的に関わってきた。

6 身体疾患の心理と震災後のこころのケアの研究

甲状腺疾患の患者について、質問紙、インタビューとバウム・テスト（描画テスト）による研究を行った。

それによると、甲状腺疾患患者は質問紙では何も問題を示さない。しかし描画テストにおいては境界に関する重篤な問題が認められる（図4）。またインタビューからは、葛藤や主体性のなさが顕著であった。

このことからすると、心理的な症状を持たない人においては、発達障害と同じような主体性の問題があるかもしれないことが指摘できる。それへのこころのケアのあり方が求められる。

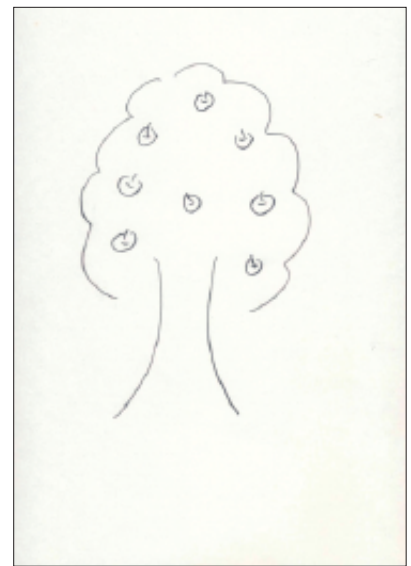
7 こころの個別性

ターミナルケアなどで身体疾患に関わる事例検討を重ねたところ、従来の死の受容のような定型的な心理療法は当てはまらず、極めて個別的で、個々の患者が自分独自の課題を見つけていくことがわかった。また震災後のこころのケアにおいても、時間とともに被害者は、自分独自の問題や課題と向き合い、よくなっていくことがわかった。つまりある身体疾患や震災のショックなどに一般化することができず、向き合い方は非常に個別的呢であり、こころのケアとしての成否は個別的な課題に入れるかどうかにかかっているとすらも過言ではない。また現場で様々なこころの問題と向き合っている専門家へのスーパーヴィジョンの必要性が認められた。

その意味でこころの研究においては、いかに個別性を大切にし、なおかつ普遍的なレベルでこころを捉えることができるかが課題であると言えよう。



a



b

図4 バセドウ病の患者のバウム・テスト

a 幹と枝の先が開いている

b 樹冠が微妙に閉じていない

こころ学への試み

鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授）

Toji KAMATA

1 こころの未来研究センターで研究してきた研究プロジェクト

8年間にわたるこころの未来研究センターでの研究活動としてわたしたちの研究室で取り組んできた問題は、①こころ観の研究、②ワザ学の研究、③負の感情の研究（怨霊から嫉妬まで）、④聖地（生態智）の研究、⑤身心変容技法の研究、の5つの研究領域である。

研究方法は、①宗教現象学・宗教生態学・解釈学・神話学・思想史などに基づく文献・思想研究、①聖地（神社仏閣霊地霊場など）や祭祀儀礼や修験道などの民俗学的参与観察に基づくフィールド研究と、③長いところでは30年以上に及ぶ参与・介入関係を保ちつつ継続した天河大辨財天社・沖縄久高島・石巻市雄勝法印神楽などへのアクションリサーチの三種を重ねあわせた（アクションリサーチとは、直面している問題解決に向けて研究者と当事者が共同で取り組む実践をいう）。

2 研究の出発点

「こころ」の不思議さや不確かさを踏まえて、問いと研究の根底に「心、言葉、ワザ、身体、形」などのキーワードを置く。

というのも、①「心」は目に見えないが、さまざまな「ワザ」や「言葉」や「身体」の振る舞い・表現によって「形」として表わされ、②「身体」は目に見え、さまざまな「ワザ」や「言葉」や「身体」の振る舞い・表現によって「形」として表わすからである。

さらに言えば、「心」が「身体」を「使う」のか、「身体」や振る舞いが「心」を「作る」のか？あるいは、「心身一如」とはどのようなことか？

道元の『正法眼蔵』『弁道話』にある「しるべし、仏道はもとより身心一如にして、性相不二なりと談ずる」という「身心一如」とはどのような事態・状態なのか？そのあたりを追究したい。

3 「こころ」という和語と「心・情・意」という漢語

最古の文献『古事記』（712年編纂）では「こころ」の当て字は「心・情・意」などである。たとえば、小さい時から泣き叫んでばかりいた乱暴者の神スサノヲの「こころ」が「善心」「清明心」であるか「邪心」「異心」はないかを探るために「宇気比」と呼ばれる神秘的な交歓の神事を行うことが物語られているが、そこでは「こころ」には「心」という漢字が当てられる。だが、その同じ「心」が『古事記』上巻の最後の方では「うらはづかし（心恥づかし）」とあるように、「うら」という訓みが当てられることもある。

「こころ」に「情」の漢字を当てている例は、山幸彦が妻の豊玉毘売命の出産するところを禁止されていたにもかかわらず垣間見た場面である。「その伺みたまひし情を恨みたまへども、恋しき心に忍びずて」とあるところだ。ここでは同じ「こころ」という和語を「情」と「心」に区別している。負の感情といえる「恨みのこころ」を感情の深みを表わす「情」と措定し、「恋するこころ」を「心」と表記し区別している。

「こころ」に「意」の漢字を当てている例は、『古事記』「序」に、「上古の時、言意並びに朴にして、文を敷き句を構ふること、字におきてすなはち難し。已に訓によりて述べたるは、詞心に速ばず」とあるところなどだ。ここでは、「ことばこころ」が「言意」と「詞心」の二種の表記で区別される。素直（朴）な「ことばとこころ」を「言意」と表記し、意を尽すことのできない「ことばとこころ」の言語表現を「詞心」と表記し、区別している。

このように、「こころ」の複雑微妙さはすでに『古事記』に明らかである。「こころの未来研究センター（KOKORO Research Center）」が探究の主題に掲げた「こころ」とはこれほどの複雑さや多様性を含み込んだ言葉なのである。

その「こころ」の在り処として、頭部（理性の座）・胸部（感情の座）・腹部（欲望や意志の座）などが考えられるが、日本人の「こころ」観の中には、現代若者用語の「キモ（核心）」にも受け継がれているかに見える、一種の「内臓感覚」がある。たとえば、りんけんバンドの名曲「肝にかかちい」（「こころにかかって」「心に残って」の意味）などはその端的な表現である。また、「腹を割って話をしよう」とか、「腹黒い」とか、「腹に一物ある」とかから、「本心」というものが「腹」と結びついて理解され表現されていることが見えてくる。この「こころ」の内臓性や内臓感覚も検討する価値がある。古く『万葉集』に「むらきものこころ」という表現が、巻1-5番の「軍王」の歌と巻4-720番の大友家持の歌に出てく

る。前者は「^{むらきも}村肝の心を痛み」、後者は「^{むらきも}村肝の^{こころ}情くだけてかくばかりわが恋ふらくを知らずかあるらむ」と、心も砕けんばかりの恋心を歌っている。

では、その「こころ」とは、どのような特質を持つのか？

- ①「こころ」は、それ自体として目に見えない。
- ②「こころ」は、行為に現われる。
- ③「こころ」は、言葉に現われる。
- ④「こころ」は、物（もの）に現われる。
- ⑤「こころ」は、場所に現われる。
- ⑥「こころ」は、「あいだ」（関係性）に現われる。

このように考えていくと、「こころとモノ」の関係を探るモノ学的テーマや、「こころと場所」の関係を探る聖地論的テーマや、「こころと歌」との関係を探る言霊論的テーマなどの各論から「こころのワザ学」という小論のテーマにアプローチする道が見えてくる。

4 「こころとモノ」：モノ学的探究

「もの」が「こころ」と「からだ」をつなぐ両義性を持つことを示す最古の記述が『古事記』の「^{うけひ}宇気比」と呼ばれる神秘的な交歓の儀式だ。そこでは、アマテラスとスサノヲの姉弟が互いの「ものごね（物実）」を交換し、それを口中で噛み砕いて息吹とともに吹き出すと、神々が化成してくるといふ不思議な場面が描かれる。

「ものごね」とは「物の実」、つまり、物の霊性的な核心を指す。日の神アマテラスがスサノヲの「こころ」に「邪心」や「異心」がなく、清らかであることを証明するために、スサノヲの「からだ」と「こころ」と霊性的象徴の「^{とつかのつるぎ}十拳剣」を「物実」とし、アマテラスの霊性の象徴の「物実」の「^{やさか}八尺の^{まがたま}勾珠」と交換して神々を生む。

この時、アマテラスはスサノヲの



図1 須我神社(島根県雲南市大東町須賀)と「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」の歌碑(写真提供:一般社団法人雲南市観光協会)

「十拳剣」を、スサノヲはアマテラスの「八尺の勾玉」を口に含み、噛み砕き、息とともに吐き出す。すると、霧の中から、^{たきり}多紀理毘賣命、^{いちきしま}市寸鳥比賣命、^{たきつ}多岐都比賣命という宗像大社に祀られる三女神が成り出で、^{まさかつ}正勝吾勝勝速日天之忍穂耳^{おしほみみの}命、^{あめのほひのみこと}天之菩卑能命、^{あまつひ}天津日子根命、^{いづつひ}活津日子根命、^{くすびのみこと}熊野久須毘命の五柱の男神が成り出る。

この「ウケヒ」によって三女神がスサノヲの「物実」から、五男神がアマテラスの「物実」から化生した。そこで、スサノヲは、「我が心清く明し。故、我が生める子は手弱女を得つ。これによりて言さば、自ら我勝ちぬ」(これで私の心が一点のやましもなく清らかであることが証明された。私の持っていた剣から三柱のうるわしい^{たおやめ}手弱女の女神が生まれたのだから、私の心が清らかでやさしくて、何の野心も持っていないということがはっきりと証明された。だから、私は宇気比に勝った)と勝鬨の声を上げ、自分の「心」が「清明」であることが証明されたと勝利宣言して、これ以後乱暴狼藉の限りを尽くして暴れ回った。この『古事記』の物語は、

- ①「こころ」はそれ自体で見えないので「もの」と行為を通して明らかにする「うけひ」というワザが必要である(身心変容技法

の始まり)

- ②「もの」には「こころ」や「たましい」、つまり「本心」や「本性」が籠る「ものごね」がある
 - ③「こころ」の状態や世界の状態を切り替えるためには種々の「ワザ」(歌や祭りという身心変容技法)が必要である
- という事態を表現している。

「心」は目に見えないが、さまざまな「ワザ」や「言葉」や「身体」の振る舞い・表現によって「形」として表わされる。そして、「身体」は目に見え、さまざまな「ワザ」や「言葉」や「身体」の振る舞い・表現によって「形」として表わすのである。『古事記』には、このような「こころのワザ学」の初期形が印象的な物語と形式を通して表現されている。

5 こころと場所：聖地学的探究

『古事記』における「こころと場所」を考える際に、もっとも大きな問題となる「場所」は出雲である。なぜスサノヲは各地を放浪し、最後に出雲の地に降り立って、そこで結婚し、住み着いたのだろうか？『古事記』においては「こころ」に深く関係する「場所」は、まず出雲である。

このスサノヲの課題は「清明心」



図2 奈具神社(京都府京丹後市弥栄町船木)(写真提供:一般社団法人京丹後市観光協会)

であった。この神の本心は「清明心」かもしれないが、しかし、それは実現してはいなかった。その本心を探るために「ウケヒ」が行われ、そこで「心の清明」が証明された。スサノヲは喜んだが、それはいまだ本心の実現ではなかった。スサノヲは追放され、各地をさすらい出雲に至り、そこで八岐大蛇を退治し、助けた娘の櫛名田比売と結婚して、住まいとなる土地を探し求め「須賀」の地に至り、「我が御心すがすがし」という「ころ」に変化する。

つまり、「場所」が「ころ」を浄化したということだ。その「場所」に至らなければ、スサノヲの「清明心」は完成しなかった。そしてその「清明心」の発露が、わが国最初の歌「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」として表現された。

このように「場所」は「ころ」に大きな作用をする。

『丹波国風土記』逸文の「奈具社」の伝承には、全国に残っている天の羽衣伝説と異なる独自の丹後バージョンがある。丹後国丹波郡郡家の西北の隅の比治の里にある比治山頂の「真奈井」と呼ばれる沼に八人の天女が舞い降りて来て水浴びしていた。「和奈佐」という老夫婦がこの八人の天女の羽衣の内、一つの羽衣を隠し

たので、一人の天女が天上に帰れなくなった。そこで老夫婦はその天女に、自分たちには子供がないので子になってほしいと頼み、子にすると、天女が「一坏飲めば、吉く万の病除ゆ」百薬の長となる酒を造ったので、たちまち家は豊かになった。だが、裕福になると、老夫婦は手のひらを返したように、「おまえはわが子ではない」と言い放って天女を追い出した。

天女は、「天を仰ぎて哭働き、地に俯して哀吟しみ」働泣して、老夫婦に、どうしてそんなひどい仕打ちをするのか、と涙ながらに訴えるが、老夫婦は聞く耳をもたず、ますます憤って追い出しにかかる。天女は泣きながら、「長い間人間の世界に住んだのでもう天上に帰ることもできない。今はもう、親もなく、行き先もない。どうしたらいいのか、わからない」と嘆きながら、「天の原 ふり放け見れば 霞立ち 家路までひて 行方知らずも」と歌を歌う。そしてふらふらと流離い、「荒塩の村」に至って、村人たちに「我が心、荒塩に異なることなし」と語ったので、この村を「比治の里の荒塩の村」と呼ぶようになった。その後、「丹波の里の哭木の村」に至り、「槻の木」にとりすがって「哭」いたので、この村を「哭木の村」と呼ぶようになっ

た。さらにまた「竹野の郡船木の里の奈具の村」に至った時、「我が心奈具志久成りぬ」と言って、この村に留まった。

「なぐ」とは、「心が穏やかになること」を意味する。波が穏やかになることも「なぐ」という。「慰む」とか「和やか」というのも同語源に由来する。

ここでは、「ころ」と「場所」は三段階で変容する。

- ①「比治の里の荒塩の村」＝「我が心、荒塩に異なることなし」
- ②「丹波の里の哭木の村」＝「槻の木」にとりすがって「哭」く
- ③「竹野の郡船木の里の奈具の村」＝「我が心奈具志久成りぬ」＝「奈具社」

最初の「荒塩の村」では「我が心、荒塩」のようだと「ころ」は穏やかではない。それどころか、「荒塩」のように荒れてギスギスして傷だらけで治まることがない。次の「哭木の村」でも「哭」いてばかりで、「ころ」が鎮まることはない。だが、三つ目の「奈具の村」に至った時、「我が心なぐしくなりぬ」と変化した。つまり、「ころ」が凪いだ、鎮まった、和らいだ。スサノヲが「須賀」の地に至って「我がころすがすがし」と成ったように、天女＝豊宇賀能売命はこの「奈具の村」の「場所の力」により「我が心なぐしくなりぬ」と「ころ」の「負の感情」を浄化させ変容させることができた。「ころ」は「場所」によって変容することの明確な伝承事例である。

6 こころと言葉 ——言霊論的探究

次に、「ころと言葉」との関係である。平仮名で著わされた最初の公的な著作が延喜5年(905年)に編纂された『古今和歌集』である。『古今和歌集』仮名序の冒頭は、「和歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事・業しげきものなれば、心に思ふ事

を、見るもの聞くものにつけて、言ひだせるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、猛き^{ものふ}武士の心をもなぐさむるは、歌なり」という和歌の効能書きであるが、

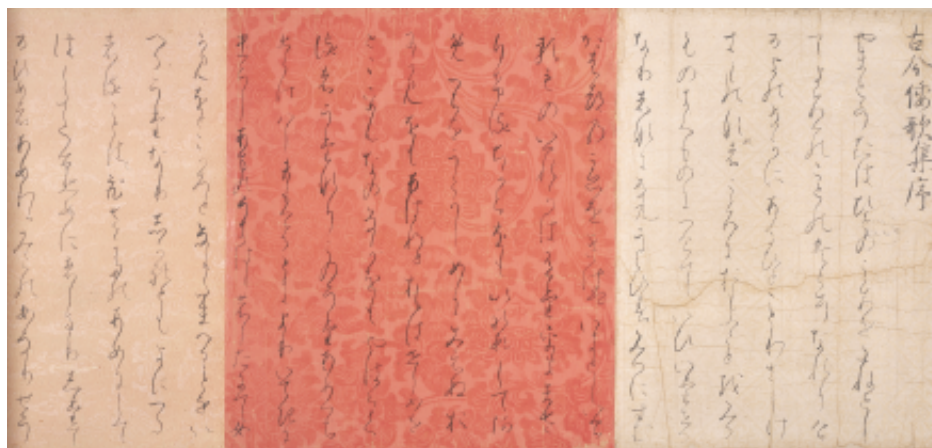


図3 古今和歌集序(巻頭部分、伝源俊頼筆、国宝、大倉集古館蔵)

ここに「日本文化」の「こころのワザ学」の秘鑰がある。その核心は、歌とは人間だけが詠うものではないという歌謡論にある。歌は「生きとし生けるもの」すべてが詠うものだという点である。

この「生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」という命題は、『古事記』や『日本書紀』や『延喜式祝詞』などに繰り返し出てくる「草木言語」というアニミスティックな万物言語観を「草木国土悉皆成仏」という天台本覚思想に媒介する万象歌唱観であるという点で、日本思想の根幹を表現するものだ。

まず和歌は、第一に、力を入れずに天地万物を動かすことができる。第二に、目に見えない鬼神の心にも「あはれ」と思う感動を引き起こす。第三に、男女の間を引き寄せ和らげる。第四に、勇敢なる荒々しい戦士の「心」をも和ませ鎮める。これこそ、「こころと言葉」、「こころと歌」とのもっとも神秘的な関係性と作用の表現であろう。

紀貫之はその歌がこの「あらがねの地」、すなわちこの地上においては、スサノヲから始まると「仮名序」で主張する。この紀貫之の『古今和歌集』仮名序によって漢詩に圧倒され低く見られてきた伝統的な和歌が甦った。そしてその「仮名序」の言説の中で、スサノヲは和歌の創始者として再浮上し、「こころのワザ学」もしくは身心変容技法として「歌の道」(歌道)が始まった。

紀貫之は、歌が靈験や倫理に叶う道であるという以上に、天地万物の詠唱を聴き取るワザであることを「生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」という一言で言いつくした。この命題がやがて西行法師などによる「和歌即陀羅尼」説を引き寄せ展開させた。

西行は言う。「此の歌即ち是れ如来の真の形体なり。されば一首詠み出でては、一体の仏像を造る思ひをなし、一句を思ひ続けては、秘密の真言を唱ふるに同じ。我れ此歌によりて法を得ることあり。若しここに至らずして、妄りに此の道を学ばば、邪路に入るべし」(『梅尾明恵上人伝記』巻上)と。一首和歌を詠むことは一体の仏像を造ることと同じである。一句を詠むことは秘密真言を唱えることと同じである。よって、詠歌によって成仏することが可能である。

このような命題は、「草木国土悉皆成仏」などの天台本覚思想と思想基盤を1つにし、世阿弥作「高砂」の「然るに、長能が言葉にも、有情非情のその声みな歌に漏る事なし。草木土砂、風声水音まで万物をこもる心あり。春の林の、東風に動き秋の虫の、北露に鳴くもみな、和歌の姿ならずや」という謡にまでつながる。この「いのちあるものもなきものもすべて森羅万象が発する声はみな和歌の数に入らないものはない。草木も土砂も風の声も水の音もみな

万物に深い心が籠っている」という思想こそ、『古今和歌集』仮名序の「生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」と記した「心」を直接引き継ぐものであり、「草木国土悉皆成仏」という天台本覚思想に通じる思想である。

世阿弥によって大成された「申楽」(能)は、「諸国一見の僧」と呼ばれるワキの仏者の傾聴力と、歌舞音曲によって霊を鎮める神道の鎮魂ワザとの見事な融合形式を実現している。シャーマニズム神道とメンタルクリーニング(リトリート)仏教の合体。そこには神仏習合した極めて日本的な演劇神事的な「こころのワザ学」がある。その「申楽」(能)をわたしは「平時の修験道」とも考えているが、ここに「日本文化」の全貌を縮約した「こころのワザ学」の果敢なる実験と実現がある。これからさらに、日本の「こころ観」や「身心変容技法」や「こころのワザ学」を深く広く探求していきたい。

参考文献

鎌田東二企画・編『講座スピリチュアル学』全7巻、BNP、2014-2016年。
 鎌田東二『世直しの思想』春秋社、2016年。
 鎌田東二『世阿弥と身心変容技法』青土社、2016年。

こころへの社会科学的方法的アプローチ——文化とこころへの問い

内田由紀子 (京都大学こころの未来研究センター特定准教授)
Yukiko UCHIDA

こころへの社会科学的方法的アプローチ

筆者の専門は、社会科学領域である社会心理学・文化心理学である。心理学の中でも、特にこころの働きが文化や社会経験を通じて形成されるプロセスに関心をもって研究を行ってきた。人文科学から自然科学まで幅広い範囲をカバーするセンターの中でも、中間にあたるソフトサイエンス領域である。

「社会・文化」は広い概念であるが、特に筆者は文化内で形成され、伝達される「シェアド・リアリティ」(ある範囲に共有された概念・信念・意味)に関連するこころの働きに関心をもっている。そしてこころの働きを支えるマクロ(社会環境要因)とマイクロ(個人内要因)の相互構成メカニズムを解明したいと考えている。私たちの文化を形成しているものを知るためには歴史や経済あるいは政治などのマクロ現象を知る必要がある。一方でそれがどのように個人に理解され、行動を引き起こすのかという、こころの働きとしてのマイクロ現象を知る必要がある。そしてそれらがどのように相互作用するのか。これを調査や実験などの実証的な手法で解き明かそうとしていくところにこの分野の面白さとチャレンジがある。

筆者のこうしたアプローチは、素朴な疑問から始まっている。高校生の頃古典文学に魅了され、「なぜ千年前の人のこころに共感するところもあれば、理解しがたいところもあるのか」を知ることができないかと考えていた。人のこころには生物学的

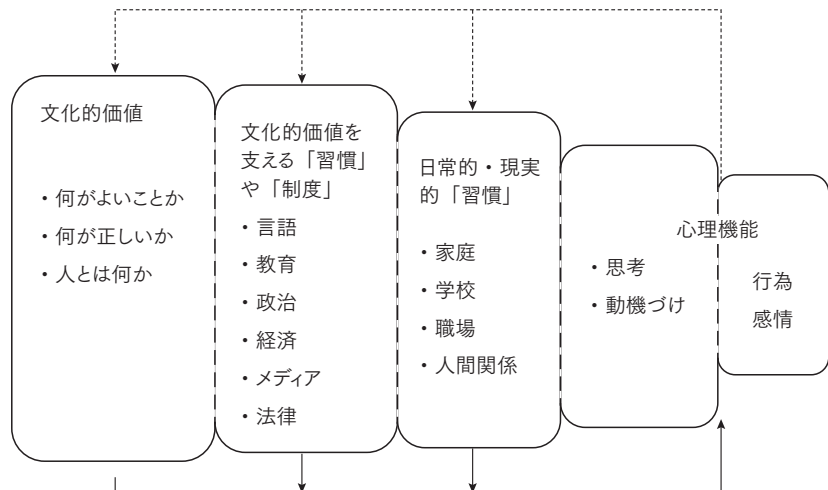


図1 文化とこころの相互構成プロセス (内田, 2009より転載)

な制約や進化の過程で生み出されてきた共通性を前提としながら、なお時代背景や文化が私たちの日常的な感情経験に影響を与える、その原理を追求したい、と。紆余曲折の後に出会った1つの研究手法が「文化心理学」のアプローチであった。

私たちは家族や友人などの身近な集団から、会社・地域・国なども含めて、様々な範囲の社会・文化の中で生きている。社会・文化の中では人々の相互交流を通じて一定の行動習慣・規範が生まれ、伝達・共有される。文化心理学の命題は、一定の社会・文化で共有される習慣・規範・価値観が、人々のものの見方・考え方・感じ方・行動などの「こころの働き」と密接に関連している、そのプロセスを実証的に明らかにすることにある。図1は、このような文化心理学の考え方を、模式的に表したものである。文化とこころの関係は、文化がこころを作り上げるという一方向的なものにはとどまらない

い。いったん人の心理プロセスが作り上げられると、個人は人とコミュニケーションをとり、行動を起こすことにより、獲得した文化慣習の維持や変容に意識的・無意識的に関わる。その過程で文化慣習の維持や変容が生じていく。このダイナミクスを、シュウェダーは「文化とこころの相互構成プロセス」と述べている(Shweder, 1991)。

文化心理学の1つの方法論として、歴史的背景が異なっている地域・集団間の「比較」がよく行われてきた。たとえば日米比較などがこれにあたる。比較して相対化することにより、どのようなこころの働きにどのような文化がどのように影響しているのかを明らかにすることができるといえる。筆者自身も主に日米あるいは日本とヨーロッパとの比較を通じて、感情経験や対人関係の維持形成メカニズム、そして幸福感というテーマでの研究を行ってきた。以下にその概要を述べる。

文化と幸福

日米比較の研究を挙げてみると、幸福の内包や外延には違いがあることが見えてくる (Uchida, Norasakkunkit, & Kitayama, 2004; Uchida & Ogihara, 2012; 内田・荻原, 2012)。北米では自己の能力の発現である「個人的な達成」が幸福の主要定義であり、自分に誇りをもち、達成感を味わうことではじめて幸福が実現するとされている。それゆえに北米で開発された幸福の指標は欲しいものを手に入れられたか、やりたいことが達成されているか、という評価に基づいている。一方で日本においては個人の達成だけではなく、幸福は関係性と切り離せないものとして定義されている。たとえば「人並みであるかどうか」「周りとの関係がうまくいっているかどうか」という側面がより重要である。北米で開発された幸福尺度を用いると日本での評定は低くなることから、筆者らは、日本的幸福の定義に基づく「協調的幸福」尺度を開発し、この協調的幸福(人並み感や他者の幸福などが含まれる)を用いると日本は欧米と比較しても低いスコアにはならないことが確認されている (Hitokoto & Uchida, 2015)。また、日本では周囲からの愛情を受け取ったり、困っている時にさまざまな側面から支えてもらったりすることが重要な幸福の要因となっている。自尊心を重要視する北米文化においては、こうしたサポートを受け取ることが自分の無力感を自覚することにつながり、自尊心に脅威を与え、結果としてサポートの効果が小さくなる場合がある。しかし日本では、たとえサポートを受け取ることでも自尊心が傷ついたとしても、サポートは対人関係の結びつきを認識させるものであるため、幸福とサポートの関係性はより強固であることが示されている (Uchida, et al., 2008)。

また、北米では「幸福の意味」を

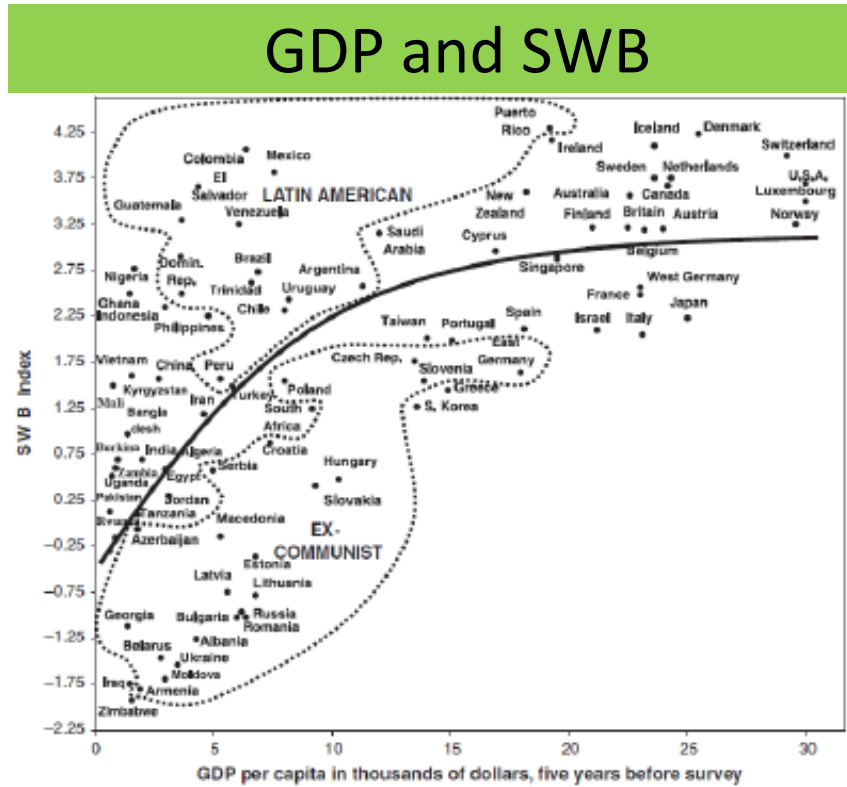


図2 GDPと国の平均的幸福レベルの関係 (Inglehart et al., 2008 より引用)

記述してもらおうと、98%の回答が、幸福についての良い側面(何事にも前向きになる、人に優しくなれる、自尊心が高まる、など)となっていたのに対し、日本では良い側面だけではなく、30%ほどの「負の側面」が記述された(「幸福が続くと、かえって不安になる」「幸福は長続きしない」「周囲の嫉妬を招いてしまう」「成長できなくなる」)。実際私たちは、「運を使い果たしてしまう」という表現にもあるように、あまりにラッキーなことが続くことと不安になることがある。人々の人生のなかには、良いことと悪いことが半分ずつくらいあり、よいことが続けば、今度はよいことが起こるかもしれない。これが本当に正しい事実かどうか確かめようはないが、一方でなじみのある「共有信念」となっていることは間違いなく、この共有信念こそが私たちの規範意識や倫理観、行動への影響をもたらす可能性があるといえる。

幸福感の比較文化研究から浮き彫りになるのは、幸福という普遍的な目

標へのルートは、社会・文化・こころのあり方によって異なるということである。こと日米における違いの背景にあるのは主体性モデルの違いではないか。北米においては個人が主体的に何かを選び取り、個人の中にある特性を原動力として物事を動かし目標達成をするという人間観がある。主体モデルにしたがえば、個人が幸福になるかどうかは個人の資質と動機付けと行動に依存し、個人が幸福を追求することを阻害せず、むしろその原動力を最大化するインセンティブを与えることが社会政策の命題となる。一方でこうした「強い主体」モデルは日本にはいまひとつフィットしない。幸福は個人の主体的達成の絶対評価として感じられるものではなく、周囲との関係性や人生全体の中でのバランスなど、相対的に評価されている。つまりマイクロに経験される主観的幸福感は、実はマクロの文化の影響を受けている。

幸福感研究は、近年心理学にとどまらず、様々な学問分野全体を通じ

た重要なキーワードとして注目を集めている。国についての豊かさを調べる指標としては、かつてはGDPを代表とする経済指標が用いられてきた。実際GDPはある一定程度まで、国の平均的幸福レベルを上昇させる効果を持つ(図2)。一方で一定程度の経済水準に達すると、GDPの上昇と主観的幸福は関連しないというパラドクスが存在していることはよく知られており(イースターリンのパラドクス)、客観的な状態(マクロ)とこころの状態(マイクロ)はイコールで片付けることができない。人間のこころには物理的環境に対しての慣れが働くし(たとえば周りがあるインフラ環境に日々感謝と幸福を感じることは残念ながら少ない)、物理的欲求だけではなく所属欲求や社会的な地位あるいは承認などに関する欲求がある。また、GDPが上昇することで格差が生み出されることもあれば、環境や時間が損なわれることもある。健康や家族、自然環境など、いずれの領域を大切にしたいかは人によっても、そして文化によっても異なるものである。こうした中、筆者らのグループは、日本のコミュニティにおける幸福についてのキーワードとして、ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)に着目した検討を行ってきた。

ソーシャル・キャピタルとコミュニティの幸福

ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)は、ロバート・パットナムによると「個人間のつながり、すなわち社会的なネットワークおよびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」として定義されている。物的資本や人的資本と同様に個人と集団の生産性あるいは犯罪率の低下に影響するという点で、注目を集めるようになった。

筆者はいわゆる「つながり」を「キャピタル」として捉えようという発想に完全に賛同するものではない。し

かしとまれソーシャル・キャピタルは、いったんできあがって外在化されれば住民はその恩恵を受けられる「マクロ要因」としても機能するし、その実態は個人個人の規範意識やつながりに対するコミットメント、あるいは信頼感などに支えられる「マイクロ現象」でもある。それゆえ、ソーシャル・キャピタルは、マクロ-マイクロの相互作用を知る上で鍵となる概念ではないかと考えている。

ソーシャル・キャピタルについての研究を始めることができたのは、こころの未来研究センターの助教時代に、竹村幸祐氏(当時研究員、現在滋賀大学准教授)との共同研究として、農業の普及指導員の研究をスタートすることができたことが大きい。センターの創設期に近畿農政局から持ちかけていただいた「普及指導が行っている、農業コミュニティでの人をつなぐ仕事について検討してもらうことは可能か」という問いに、農業社会という日本のコミュニティの原点について検討したく、調査を始めることになったのである。

普及指導員とは農業者や農業コミュニティを対象に、技術指導あるいは経営指導などを行う都道府県の職員である。農家を回って困りごとの相談に乗り、行政との仲介役をするなど、幅広い範囲の活動を実施して

いる。

フィールドワークならびに全国規模での普及指導員への調査データ分析を通じてわかったことは、農業地域の生活の上昇などに効果のある普及活動というのは、関係機関との連携調整(たとえば農地を荒らす動物への対策)や、農業者同士の連携(たとえば集落営農指導や灌漑用水路整備にともなう問題の解消)など、つながりをつくるような普及活動だということである(図3)。言い換えれば、ソーシャル・キャピタルを形成することは農業コミュニティの幸福につながっており、それは内部住民任せの部分だけではなく、普及指導からの働きかけによって支えることができるということである。生産技術の紹介と違って、可視化しにくいこうした活動が支える地域の幸福があるということは考えてみれば当たり前のようでもありながら実は新しく重要な知見でもあり、その後の研究の方針に大きく影響する研究となった。

一方で普及指導員の大きな仕事は技術指導である。効果が小さかったからといって、実は技術指導を無視するわけにはいかない。確かな技術力をもった専門家であるということに対する農業者からの信頼こそが、つながりをもたらす普及活動を効果的たらしめるものであると我々は考



図3 農業コミュニティのフィールド調査

えている。単に「農業コミュニティの信頼を形成します」といってあらわれる外部者を信頼する人はいないだろう。ここで明らかになるのは、信頼の形成は実は信頼によって支えられ、この連鎖がなければ物事を起こすことは難しいということである。なお、このテーマについては拙著『農をつなぐ仕事』（創森社）に詳細を掲載したのでよろしければご参照いただきたい。この研究はその後水産業の普及指導の研究（水産業の普及指導においても、農業コミュニティ同様の効果

が得られている）、そして農業コミュニティと漁業コミュニティ住民への大規模調査へと発展している。

集合的幸福の概念

個人の幸福はソーシャル・キャピタルを通じて周囲の幸福と影響し合う（あるいは伝播する）ということがわかりつつある（福島ら、2015）。今後の研究の展開として、これまでの個人の追求モデルから、集合的な幸福（互いが互いの幸福を支えるモデル）が成立する要件や、どのような社会の中で集合的幸福が重要となるのかを検討したいと考えている。

北米的な個人の幸福追求モデルは、個人間の競争と達成が、ひいては社会全体の利益を生み出すという資本主義モデルと連動したものである。個人の幸福追求モデルがうまく機能する要件は、個人間の競争が「共有地の悲劇」に代表されるようなマクロ環境へのダメージによる共貧状態をもたらさないこと（たとえば資源が豊富にあると想定される状態）である。しかし地球資源を考慮する

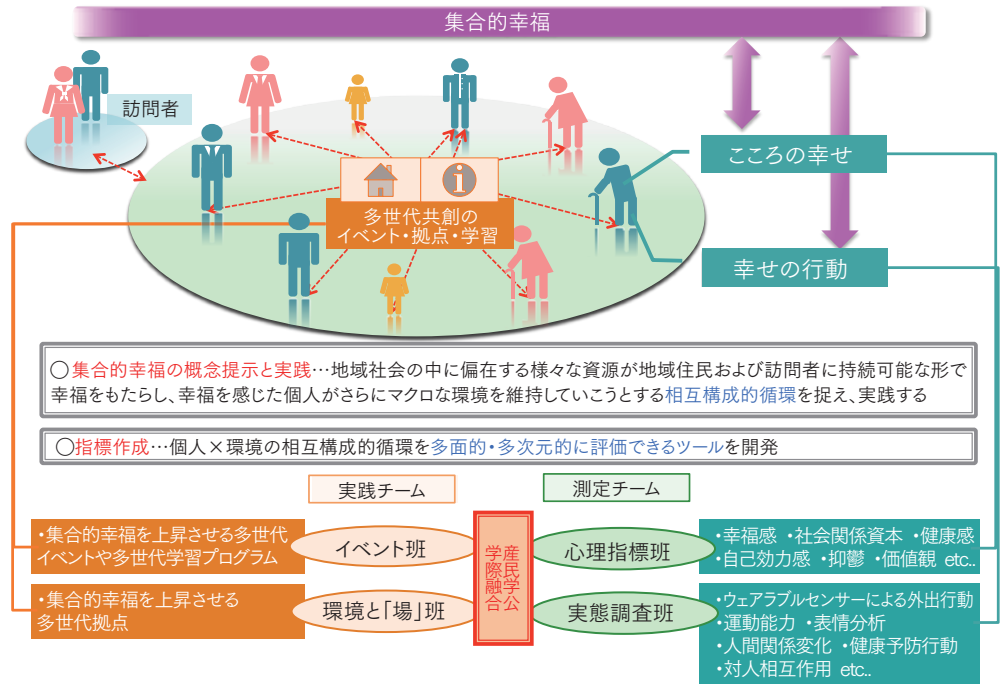


図4 JST-RISTEX「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域における集合的幸福の概念構築と多世代共創の効果検証(代表:内田由紀子)の概念図

と、この要件が成立することは非常に難しく限定的である。また、ある社会の中の住民は共貧状態に陥っていないとしても、それは実は他の社会やコミュニティを犠牲にしていることもある。こうした状況が果たして持続可能となり得るかかどうかということは真剣に考えるべきテーマである。また、このテーマの背後には人々が社会に対して共有している信念（シェアド・リアリティ）が存在する。互いの幸福や運命は絡み合っており、「持ちつ持たれつ」が当然であるというシェアド・リアリティがある社会と、互いの幸福はお互いに独立しており、それぞれの切磋琢磨による競争と機会追求が重要であるというシェアド・リアリティがある社会では、それぞれ住民同士の幸福の捉え方や伝播の仕方に違いがあると想定される。

これまでの幸福感研究は個人追求モデルに偏ってきた経緯があり、個人の幸福の平均をとって「ある国（あるいは自治体）の幸福」として代表させるという手法しか用いられてこなかった。実は平均のみでは、住民同

士が互いに搾取関係にあるか、あるいは互いに幸福を支え合う関係にあるのかどうかは検討できない。これまでの指標の単一的側面は、幸福という広い概念を限定的なレベルに落とし込み、社会の成長をある一定の方向性にのみ導引してしまった可能性がある。現在筆者らの研究チームが実施しようと取り組んでいる研究は、こうした現状に風穴を開けるべく、新たに互いのwin-winな幸福の関係（相手の幸福を支え合う状態）を捉えられるような指標を開発し、地域社会あるいは企業などのコミュニティの状態把握に有効性が発揮できないかというものである（図4）。それはひいては主体モデルのこころのあり方、あるいは、こころと切り離されたマクロ環境という考え方から脱却し、相互につながり合い広がるこころの様相に迫ろうとするものである。まだ産声を上げたばかりの研究であるが、地域や企業と協力しながら、今後の未来に向けての礎となるようなものに育てていきたい。

脳とこころの文理融合研究——正直さの研究事例から

阿部修士 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授)

Nobuhito ABE

脳とこころの学際研究

筆者の専門分野は、脳とこころのはたらきとの関連を探る「認知神経科学」とよばれる学問分野である。ちょうど心理学と神経科学との中間に位置するものである。筆者はこれまで、認知神経科学的アプローチを用いて、主に人間の正直さの研究を進めてきた。本論稿の執筆は「こころ学」の創生という魅力的なテーマについて思いを巡らすまたとない機会であり、筆者自身の今後の脳とこころの研究の方向性を大局的に考える上でも、非常に良い機会であると感じている。

ヒトを対象とした近年の脳の研究分野においては、ヒトを含む動物の「社会性」を支える生物学的神経基盤の解明に注目が集まっている。人間の社会性の研究は、当然ながら単一の学問分野でカバーできるほど単純ではない。現在では、社会学や経済学、哲学や倫理学など、様々な学問分野と神経科学の連携が進んでおり、文理融合型の研究が実際に行われるようになってきている。人間のこころを多角的に研究し、かつ俯瞰的に理解する上では、文系や理系といった垣根を超えた総合的な研究が重要な役割を果たすのである。具体的には、人文科学における問題意識に対して自然科学的アプローチを採用して問題解決を試みたり、あるいは自然科学によるデータをもとに、人文科学における問題の考察を展開するといった、双方向的かつ有機的な連携が必要である。こうした研究は、多様な手法でこころのはたらきにア

プローチする「こころ学」との親和性が高いものと考えられる。

以下では、私自身の研究成果を具体的に紹介しながら、脳の研究がどのような形で文理融合的な視点での研究を実現できるかを提案する。この研究事例から、総合的な「こころ学」を展開することの意義を、改めて考え直してみたいと思う。

性善説と性悪説——人文科学における問題設定

冒頭で述べたとおり、私は人間の正直さの研究者である。嘘は悪いことと皆がわかっている、人間はすぐに嘘をついてしまうものである。心理学の研究では「人間は1週間に10回以上嘘をつく」「夫婦間の会話の10回に1回は嘘が含まれる」と報告されており、嘘が私たちの生活とは切っても切れない関係にあることがわかる。人間社会で嘘がなくなることは、今後もおそらくないであろう。

人間は本質的に、すなわち先天的に、嘘をつく罪深い存在なのだろうか。それとも、本来は正直な存在であり、嘘という悪事を徐々に学んでしまうものなのだろうか。人文科学の分野では、こうした問いに対する答えを出すのは、必ずしも容易ではない。もちろん、自然科学によるアプローチを用いたからといって、簡単に解決できるわけではない。ただし、近年の人間のこころのはたらきについての科学的検証手法は著しく発展を遂げており、これまで意識されていなかった新たな視点を提供することも可能になっている。実際、本稿で議論する「人間はいかにして正直さを発現させるか」という問題

設定に対して、科学的な議論が成立する土壌は十分に整ってきている。

人間の本性は正直者か、嘘つきか——この問題は、中国古代の思想家たちが思いを巡らせていた問題とも、相通ずるものがある。つまり、正しいのは孟子の「性善説」なのか、荀子の「性悪説」なのか、ということである。正直かどうかという問題と、これらの思想の対立の問題とは必ずしもイコールの関係ではないが、問題を直感的に理解しやすくする上では良いたとえになるだろう。

孟子(図1)が唱えた性善説では「人間は善を行うべき本性を先天的に具有しており、成長すると悪行を学ぶものである」とされている。したがって、正直に振る舞うという善い行いは、生まれながらにその萌芽が備わっているということである。孟子は、学問を修めることで善行を発現させることができると考えているものの、その一方で悪行も人の中に宿ると考えている。この性善説に依拠すると、嘘をつくという悪行は、高次な認知処理によって初めて実現するもの、と解釈することが可能である。

しかし、荀子(図2)が唱えた性悪説はこの反対である。性悪説では「人間の本性は利己的欲望であり、善の行為は後天的習得によって可能である」とされている。一般的に、人間は何らかの利益があるからこそ、嘘をついてしまうものである。利益を獲得すること自体は、自身の生存や繁栄の可能性を高めるためには、当然のこととも言える。つまり、嘘をつくことで利益を獲得できる状況に置かれた場合には、嘘をつくこと



図1 「性善説」で知られる孟子(紀元前372年?—紀元前289年)

は自然な行為であり、むしろ正直に振る舞うことの方が、自身の欲求を制御する高次な認知処理と考えることも可能である(ただし、孟子は学問を修めることによって、たとえ利己的な本性を変えることができないとしても、礼儀を正すことは可能になると考えている。教育が極めて重要と考えており、実はこの点では、孟子と荀子の思想は一致する)。

両者の主張することは、正反対であるように見える。だが、どちらもある程度の正当性を持っているようにも思われる。躊躇なく正直な振る舞いができる場合もあれば、なんとか正直さを保つことができた、という場合も確かにあるからだ。果たして、この2つの見解を和解させることはできるだろうか? 筆者が取り組んでいるのは、まさにこうした問題を自然科学的手法によって解決しようとするものである。

正直さの認知神経科学 ——自然科学によるアプローチ

人間を対象とした脳の研究の様相は、非侵襲的な脳機能計測技術の進歩により、ここ20年ほどの間に大きく様変わりしている。1990年代中頃に、機能的核磁気共鳴画像法(functional magnetic resonance imaging: fMRI) やポジトロン断層撮像法(positron emission tomography: PET) とよばれる研究手法が確立され、生きた人間の脳活動



図2 「性悪説」で知られる荀子(紀元前313年?—紀元前238年以降)

の可視化が実現した。これによって様々な心理過程に対応する脳のはたらきが明らかにされるようになり、正直さや嘘といったテーマも著しく研究が発展したといえる(詳細は阿部・藤井〈2012〉を参照)。

嘘と脳のはたらきについての研究が進展したもう1つの背景として、人間の嘘を見破ることについての研究、すなわち虚偽検出の研究の蓄積も挙げられる。ポリグラフという言葉聞いたことがある読者の方は少ないだろう。虚偽検出の研究では、ある出来事に関する記憶の痕跡を客観的に検出するために、皮膚電位反応や呼吸、脈拍といった生理指標を測定する。こうした背景の中で、生理指標ではなく、嘘を生み出している脳のはたらきを直接調べようという動きが起こったのは、必然であったともいえる。

筆者は近年、上述のfMRIを用いて人間の正直さと脳のはたらきについての研究成果を報告したので、ここで具体的に紹介することとしたい(Abe & Greene, 2014)。この研究で用いているのは、コイントスを利用した、実験参加者が自発的に嘘をつくことが可能な実験パラダイムである(図3)。この課題で実験参加者は、コイントスの結果——コインが表か裏か——を予想する。予想に成功すると、金銭による報酬が与えられるが、失敗すると報酬が減ってしまう。この課

題の重要なポイントは、以下に示すように、2種類の条件——嘘をつくことができない「機会なし」条件と、嘘をつくことができる「機会あり」条件が設定されている点である。「機会なし」条件では、実験参加者は自分のコイントスの予測、つまり表が出るか裏が出るかの予測を、ボタン押しによって記録する。一方、「機会あり」条件では、実験参加者は表が出るか裏が出るかを、自分の心の中でのみ予測する。そしてコイントスの結果が呈示された後、実験参加者は自分の予測が正しかったかどうかを、ボタン押しによって報告する。「機会なし」条件では、実験参加者があらかじめ記録した予測に基づいて、正解・不正解が決定される。しかし「機会あり」条件では、コイントスの予測が成功したかどうかは自己申告に基づくため、ズルをして嘘をつくことが可能となる。つまり、「機会あり」条件において、予測の正答率が偶然の確率を超えている場合は、その実験参加者はより多くの報酬を得るために嘘をついているとみなすことが可能である。つまり、この課題は定量的に人間の正直さを測定し、その脳活動を捉えようとしたものである。なお、実験がすべて終了するまで、この課題が嘘をつくことに関わる脳のメカニズムを調べるための実験であることは、実験参加者には伝えられない。あらかじめ実験参加者には、ランダムなイベントを予測する能力に関する実験であるという内容が伝えられている。

筆者らが行った研究では、実験参加者全員がこのコイントス課題に先立ち、報酬情報の処理に関わる脳活動を測定するための「金銭報酬遅延課題」を行っている。この課題では画面に非常に短い時間、四角の図形が呈示される。図形が呈示されている間にうまくボタンを押すことができれば、金銭的な報酬を獲得することが可能な課題である。図形が呈示される直前の時点での脳活動を解析

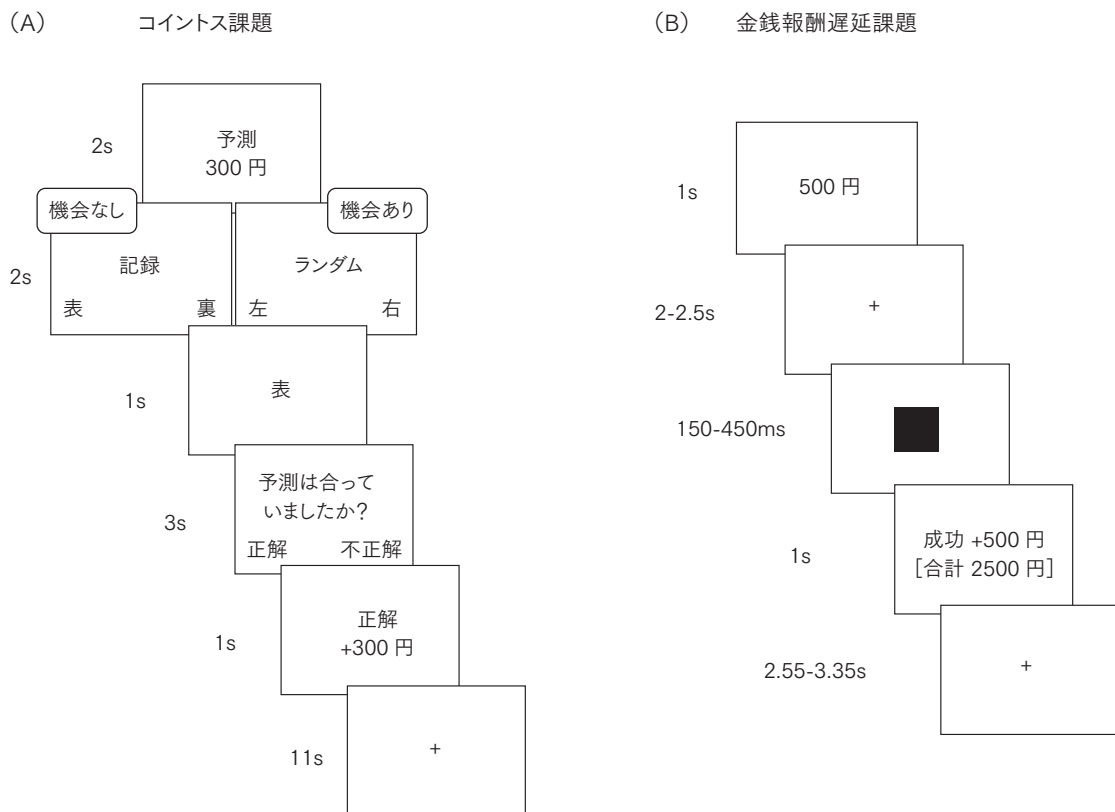


図3 (A)コイントス課題、(B)金銭報酬遅延課題 (Abe & Greene, 2014 より改変)

することで、報酬を期待する際の脳活動、特に報酬情報の処理に重要な「側坐核」と呼ばれる領域の活動を特定することが可能である。筆者らの研究では、この側坐核の活動の個人差を報酬への反応性の個人差の指標、つまりどれくらいお金に惹きつけられているかの脳のレベルでの指標として用いている。

得られた結果は以下の2点である(図4)。まず、金銭報酬遅延課題での報酬期待に関わる側坐核の活動が高い実験参加者ほど、コイントス課題において嘘をつく割合が高いことが明らかとなった。さらに、金銭報酬遅延課題での側坐核の活動が高い実験参加者ほど、コイントス課題で嘘をつかずに正直な振る舞いをする際に、衝動の抑制や自己制御といった高次の認知処理に関わる前頭前野の活動が高いことも明らかとなった。

科学の視点で孟子と荀子を和解させる——文理融合の可能性

これらの結果を解釈すると、以下

のようになる。まず、報酬への反応性の個人差(本研究では側坐核の活動の個人差)が、正直さの個人差を、ある程度規定する可能性を示唆している。正直さの個人差がすべて、報酬への反応性の個人差によって説明できるわけではないが、大きく影響を与える要因であることは間違いない。また、報酬への反応性の高い個人ほど、正直に振る舞う際により前頭前野のはたらき——すなわち、自制心や行動の制御といった機能を必要とする、と解釈できる。報酬への反応性の高い個人は、正直な行為は自然にではなく、前頭前野の機能に支えられた意志の力で実現されるものであると考えられるので、性悪説で説明できる知見と言える。一方、報酬への反応性の低い個人の場合は、そういった前頭前野の機能は必要とせず、自然に正直に振る舞えるという解釈が可能であり、これは性善説の考えにフィットする知見である。つまり、自然な正直さを発現するか(人間の正直さを性善説の枠組みで捉え

るか)、意志の力で正直さを発現するか(人間の正直さを性悪説の枠組みで捉えるか)が、その個人の報酬への反応性に依存する、とも言えるのである。

これらの結果は、性善説と性悪説との対立を考える上で、非常に示唆に富む知見である。やや論理の飛躍があることを承知の上で議論するならば、正直さのメカニズムを考える際には、性善説と性悪説のどちらか一方が間違っているというわけでもなければ、両方の説がそのまま当てはまる、というわけでもない。どちらの説もある程度は正しいのだが、報酬への反応性によって、性善説で説明可能な正直さが発現するか、性悪説で説明可能な正直さが発現するかが変わる、ということである。報酬への反応性という1つの軸が、両者を統合的に理解するためのきっかけとなっているのである。もちろん、今後も研究を積み重ねることで、こうした解釈が妥当であるかどうかは検証が必要であるが、生物学的な視

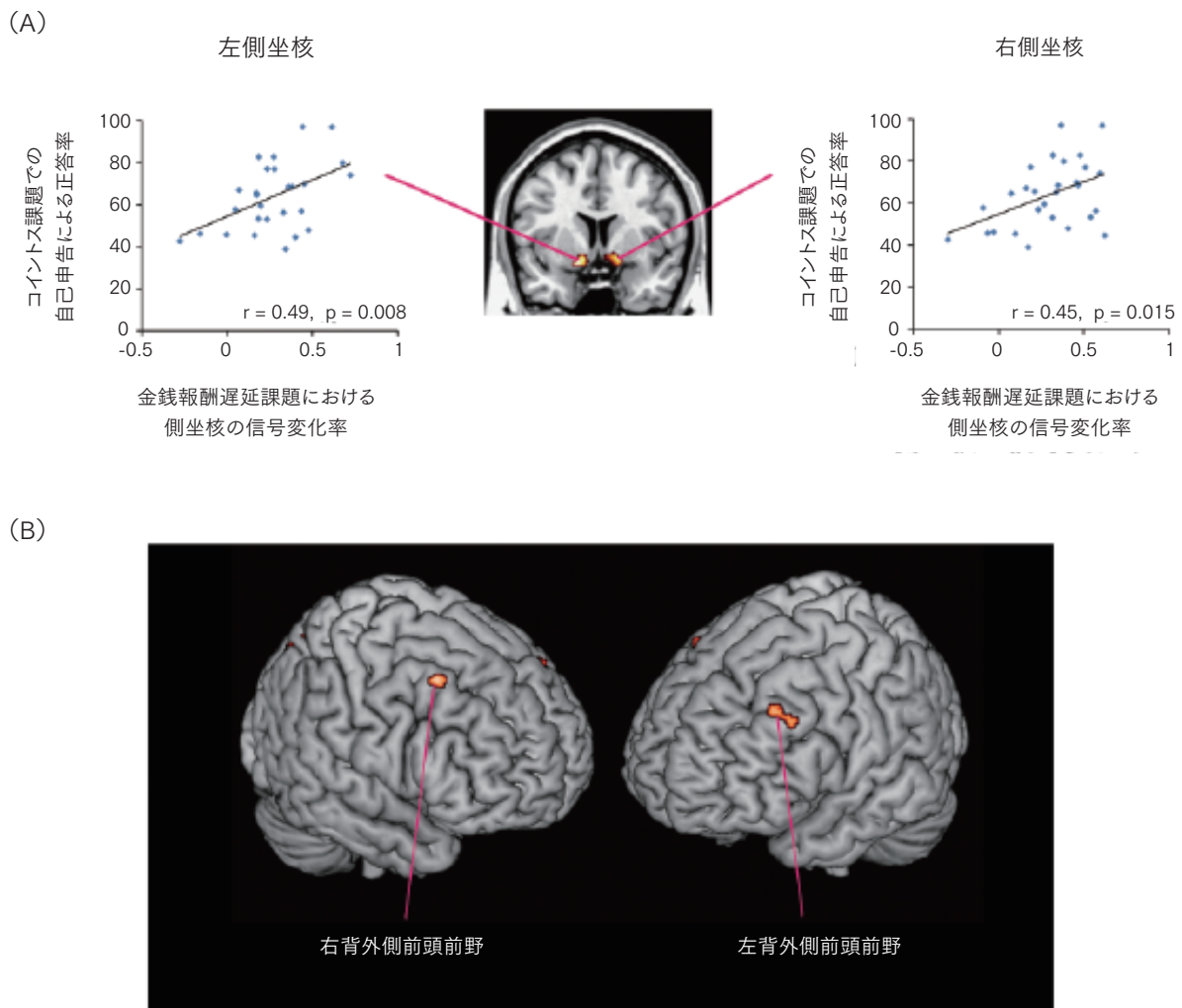


図4 (A) 報酬への反応性と不正直な行為の頻度との正の相関。横軸は金銭報酬遅延課題での報酬期待に関わる側坐核の活動を、縦軸はコイントス課題での自己申告による正答率(=嘘をついている頻度)を示している。(B) 報酬への反応性と正の相関を示した、正直な振る舞いに関わる前頭前野の活動。(Abe & Greene, 2014より改変)

点から、性善説と性悪説とを和解させるための新たな一歩を踏み出すことができたと考えられる。

今後の展望

上記はあくまで1つの研究例であるが、一見相反するような人文科学上の学説であっても、自然科学の立場から再考することで、両者を統合して理解することが十分可能であることがわかる。こうした文理融合型の視点による研究は、今後の「こころ学」の創生に向けて、1つの有効な手法になるのではないと思われる。人文科学と自然科学が容易には交わらないことは、かつてチャールズ・パーシー・スノー『二つの文化

と科学革命』の中でも指摘され、多くの議論を巻き起こしたが、現在は両者の統合も、ある程度は可能なレベルにまで達しているのではないだろうか。

脳の研究を続ければ、脳のはたらきはある程度のところまではわかる。こころのはたらきも、それぞれの学問分野からアプローチすれば、専門的見地からはある程度理解できるようになる。しかし、こころはそれ自体が多面的であり、一筋縄では理解できないものである。だからこそ、1つの研究分野にとらわれることなく、臨機応変に様々な分野の知見を取り入れていくことが、「こころ学」の創生には必須の条件である。

参考文献

阿部修士、藤井俊勝 (2012) 「嘘をつく脳」、苧阪直行編『社会脳科学の展望——脳から社会をみる』社会脳シリーズ第1巻、新曜社、35-61頁。
 Abe N, Greene JD. "Response to anticipated reward in the nucleus accumbens predicts behavior in an independent test of honesty." *Journal of Neuroscience*. 2014; 34: 10564-10572.
 チャールズ・P・スノー、松井巻之助訳『二つの文化と科学革命』みすず書房、2011年。

「こころ」の文献学的研究の総括および展望

熊谷誠慈 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授)
Seiji KUMAGAI

序

筆者がこころの未来研究センターに着任してからのおよそ3年間、様々な質問を受けてきた。たとえば「仏教学者なのになぜ心理学の研究センターにいるのか」という質問には、「仏教とは心の働きを分析する東洋の心理学だ」と回答してきた。また、当センターの英語訳がKokoro Research Centerであることから、海外では「Kokoroとはどういう意味なのか」という質問をよく受ける。「KokoroとはMindと似ているが少し異なる概念だ」と答えると、「どこが同じでどこが異なるのか」という質問が待っている。これまでは「KokoroはMindよりも広い概念だ」などと曖昧な答えで逃げてきたが、KokoroとMindとの相違について真剣に考えなければならない時が来ていると感じている。

本号は「こころ学創生」というテーマの下、各教員が「こころ学」の構築に向けて明確なヴィジョンを提出する。本稿では、「こころ学」を創生するにあたり、「こころ」の文献学的研究についての試論を提出し、筆者の研究の位置づけを再検討した上でこれまでの研究を総括し、将来への展望を述べたい。

1 「心」と「こころ」

「こころ学」の英訳は「Kokoro Studies」であり、「Mind Studies」や「Psychology」とは異なる。となれば、一般的な「Mind」と日本的な「Kokoro」とを区別する必要がある。

本稿では便宜上、前者を「心」、後者を「こころ」と表記する。日本的な「こころ」が何かを考えるためにも、日本的ではない「心」とは何かを正確に知っておく必要がある。

たとえば、アリストテレス(384-322 BC)は『心(魂)について(Peri Psyches)』という著作の中で「心」について詳細な解説を加え、「心」を「道具としての器官をもつ自然的物体の第一の終局態」と定義している¹。桑子敏雄は、この定義について「心とは身体がある一定の能力を持った状態である」と言い換えている²。

ただし、アリストテレスなどギリシャの哲学者たちによる「心」の説明は、世界最古のものではない。紀元前13世紀を中心に成立したとされるインドのバラモン教最古の宗教文献『リグ・ヴェーダ』には、「心」について興味深い記述が存在する。

河川のごとく、靈感の言葉は合体して流れ出ず、内部において心(情感)と意(思考)とにより浄化せられて³。

『リグ・ヴェーダ』の時点で「心」が情感と思考とに区分されていることは大変興味深い。文献としては『リグ・ヴェーダ』が最古ということになるが、よりプリミティブな「心」の概念は、当然それ以前から存在していたことになる。さらに、紀元前10世紀頃に成立したとされる『アタルヴァ・ヴェーダ』の中では次のように説かれている⁴。

5つの感覚器官(眼・耳・鼻・舌・身)と六番目の意は、祈願文によ

って体内において鋭敏になる。

すなわち、紀元前10世紀頃のインドではすでに意識と5種の感覚器官という6種の認識主体について明確な言及が行われていた。つまり、インド文化圏においては、かなり早い段階で、認識主体をはっきりと細分化していたのである。

中国ではどうであろうか。現在確認できる最古の漢字は甲骨文字であり、最も古い甲骨文字は殷の武丁の時代(紀元前14世紀頃)のものと考えられる。落合淳思は、甲骨文字の「心」字は、心臓を象形文字にしたものと説明し、図1の左側の文字について、心房と心室とが分かれた形状との説明を加えている⁵。ただし、甲骨文字の段階ではあくまで臓器としての意味合いが強く、西周時代(紀元前11世紀頃～紀元前771年)に入ってから「こころ」の意味が付され、感情を表す文字として使われはじめたようである⁶。



図1 甲骨文字の「心」字

最後に、日本の「こころ」という語に目を向けてみたい。「こころ」という言葉は、『古事記』(712年)や『万葉集』(8世紀後半)といった初期の文献中にすでに多数登場している。相良亨によれば、『万葉集』で「こころ」と訓まれる漢字は「心、情、意、神、景迹、於、許己呂、己許呂、許許呂、己己呂」などであり、

計312カ所のうち、「心」(130カ所)と「情」(112カ所)の2字がほとんどを占めている⁷。なお『日本国語大辞典』は「こころ」を次のように定義している。

人間の理知的、情意的な精神機能をつかさどる器官、また、その働き。「からだ」や「もの」と対立する概念として用いられ、また、比喩的に、いろいろな事物の、人間の心に相当するものにも用いられる。精神。魂。

語源について、『広辞苑』は「禽獣などの臓腑のすがたを見て、コル(凝)⁸またはココルといったのが語源か。転じて、人間の内臓の通称となり、更に精神の意味に進んだ」と説明しており、「こころ」の語源を内臓との関係で理解しようとするものも多い。この点は、上述の甲骨文字における「心臓からこころへ」という語義変化の流れに近い。

2 時代・地域を超えた文献学的「こころ」研究

前節では、少々乱雑ではあるが、ギリシャ、インド、中国、日本における「心」という語の起源や語義を概観した。その際に改めて痛感したのは、語義や語源、用法等の正確な解明作業には、各言語、各時代、各地域の文献を正確に読みこなせる専門家の協力が不可欠だということである。

もちろん、すべての時代や地域における用法を網羅することなど到底不可能であろうが、たとえば「心」という一単語に限定するならば、主要な時代、地域、言語をすべて網羅することが可能なのではないか。かすかな希望を持って、試しにCBETA (Chinese Buddhist Electronic Text Association、中華電子佛典協会)の検索サイトを使用し、主要なインド仏教文献の中国語翻訳と中国成立の仏教典籍中に、「心」という単語が何カ

所出てくるかを検索してみた。結果は、35万1104件という途方もない数字であった。漢文仏教典籍のみならず、道教や儒教など他の宗教文献、さらに文学や歴史文書にまで手を広げれば、中国という一地域でさえ、天文学的な用例数になりそうである。

ここで早々に「全文献の検討」という大望を諦め、文献を絞って調査する方針に転換することにした。まず、各語彙のルーツを知るという意味で、①「最古層の文献群を検証する」という方針に反対する人は少ないだろう。また、文献数の比較的少ない②「古代の文献群を検証する」ことも不可能ではなかろう。さらに、効率よく文献を絞る必要があるが、各言語における時代的な「縦のライン」に沿って③「後代の文献群を検証」し、語義・用法の時代的変遷について体系的に整理していく必要があるだろう。なお、精神性に関する縦のラインという点で、④「土着宗教文献群の検証」も進めたい。

一方、「横のライン」については、仏教思想に着目したい。2500年前頃にインドで誕生した仏教は、インド以東の各国に広く伝播し、外来宗教でありながらも各地で思想的、倫理的に深い影響を与えた。いずれの地域においても、それぞれ異なる土着の精神性や感性を有してきたわけだが、仏教思想という点に立脚すれば、(それがたとえ現実とかけ離れた理念的なものであったにしても)共通思想を保持していたのである。すなわち仏教とは、当時のインド以東のアジア地域における共通言語ならぬ、共通思想であったといえよう。したがって、広大な仏教文化圏において、仏教という立場に立脚すれば、「心」という概念についても共通認識を持っていたことになる。そうした仏教的精神性は「横のライン」としてアジアに広く流布し、各地の土着的精神性という「縦のライン」とぶつかり合うことになる。その結果、仏教文化圏の国同士で「どこか似ていなが

らもどこか異なるこころ観」なるものが形成されていくことになる。そこで第5の方法論として、⑤「仏教文献群を検証する」ことを挙げておきたい。

すでに筆者は、ヒマラヤ地域に着目し、土着宗教であるボン教における「心」・「心の作用」と、外来宗教である仏教における「心」・「心の作用」とを比較し、両者の共通点および相違点について検証を進めてきた⁹。結果、ボン教側が、仏教側の精神性を改変したうえで受容し、独自の精神性を構築していったという事実が判明した¹⁰。

当然、こうした「縦のライン」と「横のライン」だけの分析で、各国の、そして日本の「こころ観」の構造全体を完全に解き明かすことはできないであろうが、地域的・時代的な変遷を大まかに追うという意味では、有効な研究方法の1つであろうと考えている。もちろん、研究を進める中で適宜方法論を修正していく予定である。

2種、計5つの方法論

[A] 縦のライン：同一言語文化圏内における語義や用法の検証

- ①最古の文献群を検証する
- ②古代の文献群を検証する
- ③後代の文献群を検証する
- ④土着宗教文献群を検証する

⇒語義や用法の時代的変遷について体系的に分析する

[B] 横のライン：言語文化圏を超えて共有される語義や用法の検証

- ⑤仏教文献群を検証する

⇒インド以東のアジア仏教文化圏に共通する語義や用法を体系的に分析する

(※縦のラインと横のラインの交差点に注目し、相互の影響を検証)

なお、この研究手法は、視点を変えれば「心を基軸とした学際研究」と呼ぶこともできよう。当面はイン

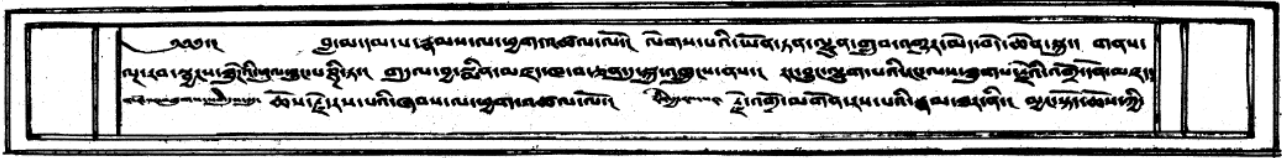


図2 ツァンパ・ギャレーの自伝の写本

ド以東のアジアに限定して研究を進めるが、それでもインド学、東アジア学、東北アジア学、東南アジア学など、ディシプリンを超え、言語、地域、文化を越境した学際研究が行われることになる。

3 チベット学およびブータン学の意義

インド最古の文献群であるヴェーダ文献にせよ、中国最古の甲骨文字文献群にせよ、筆者の独力での正確な読解は極めて困難である。仏教にしても、中国や日本のそれは筆者の専門外である。では筆者がどこで専門性を発揮できるのかといえば、インドの大乗仏教（特に中観派）、チベット仏教、ブータン仏教、およびボン教（ヒマラヤの土着宗教）である。

チベット仏教研究の重要性

仏教が7世紀初頭にチベットに伝わって以降、チベットの仏教は、8世紀頃にはブータンへ、13世紀には元朝（特にモンゴル地域）、17世紀には清朝へと伝播し、それぞれの地で国教的な位置づけを得るに至った。すなわちチベット仏教は、ヒマラヤ地域から東北アジアや東アジア（朝鮮や日本を除く）へと広く伝播した「横のライン」として重要な意味を持つ。

ここで少し、チベット仏教の構造に着目しておきたい。チベット仏教にも顕教と密教の両者が存在する。チベット密教はインド後期密教の流れを受けており、日本や中国の密教とは少なからず異なる。一方、顕教については、部派仏教系の①説一切有部と②経量部、大乗仏教系の③瑜伽行唯識学派と④中観派という、インド仏教の代表的な4つの学派を、

前者から後者へと階段を上昇する形で修学する。このうち、①説一切有部は「俱舍宗」に、②経量部は「成実宗」に、③瑜伽行唯識学派は「法相宗」に、④中観派は「三論宗」に相当する。すなわち、奈良仏教の南都六宗のうちの4宗派の教学が、詳細な点こそ異なるものの、チベット仏教文化圏において必須の学問として修学されてきたということになる。ここでようやく、チベットから日本に至るまでの広範な地域がつながった。すなわち、チベット仏教のいうインド仏教の4大学派に着目すれば、中国仏教を通じて日本の「奈良仏教」へと行きつくことになる。

国民総幸福政策とブータン仏教

さらに、ブータンにも少し触れておきたい。近年わが国において注目を浴びてきているブータンであるが、国外ではすでに同国の「国民総幸福」（GNH：Gross National Happiness）という政策が注目されていた。少し詳しく見てみると、ブータン王国の憲法や国民総幸福政策、さらにブータンの社会や文化に至るまで、その基盤に仏教哲学が存在していることが分かる。

こころの未来研究センターでは、2012年4月に「ブータン学研究室」を立ち上げた。同研究室の目標は学際的なブータン研究であるが、現在の主軸はブータン仏教研究であり、①文献研究、②フィールド研究、③応用研究が3本柱となっている。文献研究としては、ブータンの国教的な位置づけにあるドゥク派の開祖ツァンパ・ギャレー（1161-1211）の全集の批判的校訂テキストを作成中である（図2）。フィールド研究としては、

サキヤ派やゲルク派といったブータンにおける宗教マイノリティについて、周辺国との関係性の中で研究を進めている（図3～5）。応用研究としては、国民総幸福を含めたブータンの文化や社会と、仏教思想との関係性を中心に研究を進めている。

国民総幸福政策を生み出したブータンの精神性（「心」）が仏教思想に基づくのであれば、日本の精神性（「こころ」）も、国民総幸福のような応用実践的概念を生み出す可能性を備えているのではなかろうか。

結語

本稿では、「こころ学」という新たな学術領域を創設するにあたり、文献学的な研究の可能性を模索しながら、筆者の研究を総括した上で、将来への展望を論じた。

第1節では、一般的な「Mind」（「心」）と日本的な「Kokoro」（「こころ」）とを区別し、言語文化圏あるいは地域ごとの「心」という語の起源や語源、語義について検証する必要性を、具体的事例を挙げながら論じた。

第2節では、「こころ観」の研究手法として、①「縦のライン」（時間軸）として同一言語文化圏における語義や用法の時代的変遷を検証し、また、②「横のライン」（空間軸）として仏教に注目し、インド以東に広く伝播した仏教で使用される「心」関連諸語の意味や用法を検証する必要性を提示した。仏教的な精神性が「横のライン」としてアジアに広く伝播し、各国の土着的精神性という「縦のライン」とぶつかり合うことで、仏教圏において「どこか似てい



図3 ブータンの少数宗派であるサキャ派のパンジュール寺(民家形式の建物となっているため、外観からはお寺であることが分かりにくい)



図4 ブータンの少数宗派であるゲルク派のメラ寺



図5 ブータンの民家で法事を行っている僧侶たち

ながらどこか異なる「こころ観」なるものが形成されていく可能性について検討した。

第3節では、筆者の専門に引きつけ、ヒマラヤ地域からモンゴル、中国(清朝)へと「横のライン」として広がるチベット仏教文化圏と、中国・朝鮮・日本といった東アジア漢字文化圏との両圏が共有した精神性について検討した。その際、チベット

少なからぬ影響を与えてきたということもできるのではないだろうか。

注

- 1 桑子(1999:72)。
- 2 桑子(1999:203)。
- 3 辻(1970:273-274)。
- 4 Whitney(1905:912)。当該箇所については、中谷英明教授(関西外国語大学)よりご教示いただいた。記

仏教の顕教は、日本の奈良仏教の4派と教義的共通性を有していることを指摘した。ここでようやく、インド、ヒマラヤ、東北アジア、東アジアの「心」と日本の「こころ」とが、横のラインによってつながった。さらに、チベット仏教文化圏のうち、ブータン仏教の研究の詳細について応用可能性も含めて紹介した。

もちろん、本稿は宗教哲学・文献学的な文脈に沿って論じたものであり、議論のすべてを世俗的文脈にそのままの形で適用することはできない。しかし、「四苦八苦」や「他力本願」といった熟語のように、多くの仏教哲学用語が、意味を変えながらも現代語として残っていることを考えれば、こうした宗教思想が世俗社会の「こころ観」の形成に対しても

して御礼申し上げる。

5 落合(2011:124)。

6 落合(2011:124)。

7 相良(1995:15-16)。

8 『日本国語大辞典』は「こころ」について12の語源を挙げており、4つは「凝る」に関わるものである。

9 本研究は、科学研究費挑戦的萌芽研究「ボン教の範疇論の研究：仏教アビダルマ思想との比較を通じて」(研究課題番号26580007)にて進行中である。

10 筆者(熊谷forthcoming)は、現存最古のボン教存在論の哲学書『存在の蔵』(ジャンシュン語題名 *Ti ka rgya se lig min rkya*、チベット語題名 *Srid pa'i mdzod*)が、計51種の「心作用」を設定し、そのうちの37種が、インド仏教唯識学派のヴァスバンドゥ(4世紀)の存在論的哲学書『五蘊論』(*Pañcaskandhaka*)の提示する「心作用」と一致することを確認した。

参考文献

- 落合淳思(2011)『甲骨文字小字典』、筑摩書房。
- 貝塚茂樹・伊藤道治(2000)『古代中国』、講談社学術文庫。
- 工楽英司(1975)「甲骨文字雑考II『心』」、『東海大学教養学部紀要』、Vol. 6、pp.123-131。
- 桑子敏雄(1999)『アリストテレス心とは何か』、講談社学術文庫。
- 相良亨(1995)『一語の辞典こころ』、三省堂。
- 辻直四郎(1970)『リグヴェーダ讃歌』、岩波文庫。
- Kumagai, Seiji. (forthcoming) "Bonpo Theory of the Five Aggregates," *Journal of Indian and Buddhist Studies*, vol. 64.
- Whitney, William Dwight (1905) *Atharva-veda sambhitā*, translated with a critical and exegetical commentary by William Dwight Whitney; revised and edited by Charles Rockwell Lanman (Harvard oriental series; v.7-8), Cambridge: Harvard University, 1905.
- 『日本国語大辞典』日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編、第2版、東京:ネットアドバンス、2007年。

現代社会とこころの「発達」

畑中千紘 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教)
Chihiro HATANAKA

時代の変遷と現代のこころ ——消えた葛藤

河合隼雄『昔話と日本人の心』は、昔話や神話に人々のこころの構造が反映しているとするユング心理学の立場から日本の昔話を読み解いた名著である。西洋の物語とは異なり、確固とした中心をもたない日本人の緩やかなこころの構造を浮き彫りにしたもので、初版は1982年に発刊された。それから30年余りがたった現在、子どもたちに語られる昔話の構造は変化をみせている。たとえば「桃太郎」では、かつて「家来」であった犬、猿、キジは今や桃太郎の「仲間」である。それゆえ、これまでは鬼ヶ島への道中、犬や猿が舟を漕いでいたのが、今では桃太郎を含めた全員が交替で漕ぐのだという。元々中心がなかった日本の昔話は今や、さらにフラットになっているようである。

このような印象は、昨今の臨床現場での葛藤のない事例の多さにもみとれる。たとえば不登校の場合、かつては「学校へ行きたいが行くことができない」という罪悪感や葛藤を抱えている生徒がほとんどであった。いっぽう現在では、教師や親は無理しなくていいと言うし、自分は漠然とヤバいなとは思っているものの、「そもそも学校に行くかどうか考えていない」と言う中高生に出会うことも多い。普段の授業には行けなくても、楽しいからと行事や修学旅行だけ登校する生徒も増えている。学校に行くことを良しとする価値観を一方的に押しつけるような社会でなくなったことは良いことのようにも思われ

るが、葛藤や反抗が生じ、それをばねに成長する機会が減っていることも事実であろう。

発達は「障害」されているのか？ ——自由な適応の形

こころの未来研究センターの臨床心理学関連のプロジェクトでは、こうした臨床的実感をベースにして研究を進めてきた。特に発達障害はそのキーコンセプトになっている。これは発達障害の理解と支援を推進するためでもあるが、発達障害がなぜ現代においてにわかに問題化したのかを考えることが、今の我々のこころを理解する上で重要と考えられるためである。これまでの調査研究が明らかにしてきたのは、現在の大学生は10年前の大学生よりも、より発達障害に近い特徴を示すということである。紙幅の都合でここではごく大雑把な言い方になってしまうが、描画や心理検査の特徴を比較してみると、積極的に選択や断定をしない傾向がみられたり、絵のまとまりが弱くなったりと、イメージの構造は次第にゆるくなってきていることがみとれるのである(図1は大学生の描いた「風景構成法」であるが、幼さを感じられる)。

このようにみると、全体として発達のスピードがゆるやかになっているのではないかと考えられてくる。先に示した、不登校になっても悩まない学生も幼いとか未熟だとみることでもできるだろう。しかし、これらは単なる発達のあゆみの「遅れ」と言えるのだろうか。発達障害の増加はその結果なのであるだろうか。

これには、発達障害のプレイセラ



図1 大学生の描いた「風景構成法」

ピーでみられるある一群の子どもの変化のパターンが答えを示してくれるように思われる。来談時には発達検査で得意・苦手な項目の凸凹があった子どもが、6カ月のセラピーの後にフラットでバランスのとれた発達曲線を示すようになることがある。すなわちそれは、苦手だった力が伸びたと同時に、人より得意だったことが「普通」に下がるということを意味している。こうした子どもたちは単に発達が遅れているのではなく、自由な適応の形をとったために、一般的な発達曲線から一時的に外れてしまったと考えることもできるだろう。不登校の中学生にしても、家でゲームばかりする毎日に葛藤はしていなくても、ネット上では社会人のチームに混じり立派にやりとりをするなど、単に幼いだけではないと思える場面も多い。社会の側が一定の発達モデルを示さなくなっている現在、発達の形や順序はより個別적인になってきているのかもしれない。

このような現況を考えれば、「発達」や「成長」、それを障害すると同時に促進する「悩み」「葛藤」といった概念自体を見直すことが、これからのこころを考えていくために重要となっていくのではなかろうか。

超高齢社会への挑戦——臨床と研究の折衷派だからできるアクションリサーチを命綱に

清家 理 (京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定助教)

Aya SEIKE

1 「3点の研究」＝「こころとくらしの課題」のモザイク紋様

現在、私の研究は3つに大別できるが、すべて超高齢社会を迎えている日本において、人が抱える「こころとくらしの課題」に対するアクションリサーチである。第1は、地域住民を対象にした「孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発プロジェクト」である。第2は、「認知症を持つ人の家族介護者」の負担軽減に焦点化したアクションリサーチである。そして、第3は、よりよい終末期のあり方を模索するための検証研究である。

第1の研究では、吉川左紀子教授と共に、学内外の多機関・多職種協働で講師や相談支援を担う、ステップアップ方式の双方向型学習プログラムを地域住民に提供し、その効果を検証中である。第2の研究は、鳥羽研二先生、櫻井孝先生方をはじめ、臨床現場スタッフや家族介護者と共に複数研究プロジェクトを進めている。近年では、4年かけて検証を続けた「認知症を持つ人の家族介護者に対する包括的教育支援の効果検証研究」がある。そして第3の研究も、銘苅尚子看護師、住江浩美看護師、武田章敬先生、鷲見幸彦先生方をはじめ、臨床現場スタッフや患者さん、家族さんと共に進めている。現在、終活や事前ケア計画(Advance Care Planning)など、エンディングライフの備えが話題になっているが、その中で、日本の文化に即した、エンディングライフの備えに対する教育方法や啓発方法を模索するための基礎研究を遂行している。

2 研究の社会的意義

i) 現在の研究テーマ「創生」過程

私自身、現在の研究に行きついた経緯は、「現場」に集約される。今のアクションリサーチテーマの原点であるMSW(医療ソーシャルワーカー)になった契機は、疾患やソーシャルサポートに対する無知と偏見に対する後悔である。十数年、大学病院、急性期病院のMSWとして、様々な疾患の患者と家族を対象に退院支援や社会復帰支援を実施してきた。しかし、相談にたどり着けない多くの人をサポートするにはどうしたらいいのか、結局、自分の支援は自己満足の域を出ないのではないのか、そんな疑問に苛まれた。そして、行きついたのは、支援を要している人が路頭に迷わなくていようにすること、エビデンスに基づく方策の提示であった。具体的には、支援を要している人が本来持っている自己解決や自己決定の力などを引き出しながら(ストレングス・エンパワメント)、課題に対処する力(コーピング)を強化することであった。これらの経緯を踏まえ、3点のアクションリサーチに至った。

ii) 「こころとくらしの課題」のモザイク紋様にアプローチした暁には

3点の研究の総合的目標は、「よりよく生きる」ためのエビデンスに基づく方策を地域社会に還元しつつ、超高齢社会の日本から、その知見を発信していくことである。3点の研究それぞれの研究目標は、以下のとおりである。



孤立防止のための互助・自助強化をめざすプロジェクト「くらしの学び庵」

まず、第1と第3の研究では、①住民の孤立に伴う心身・社会活動面の不健康や障害予防、②互助・近助・自助の育成強化、③よりよく生きぬくための知恵の集約をめざしている。

第2の研究では、限りある社会資源の有効活用も視野に置き、認知症の治療や介護に関する多くの情報や混乱する気持ちに惑わされないようにする、「介護者自身の介護基礎体力の育成」を目標としている。このアクションリサーチを通じ、介護者自身が自らの介護環境を整えるために、「脱受け身」をめざし、認知症を持つ人、介護者、専門職、すべてがよりよい状況でケアを受ける、または提供できることを最終ゴールとしている。

モザイク紋様を見せる、「人々のこころとくらしの課題」に対し、多職種と当事者の協働で日本から課題解決の方策を発信していく積極的なアプローチを日々重ねていくべく、今日も研鑽を重ねている。

環境が調整するヒトの知覚・認知

上田祥行 (京都大学こころの未来研究センター特定助教)

Yoshiyuki UEDA

ヒトの認知処理機構

私たちがモノを認知する機構は、周囲の環境の影響を受けて変化する可能性が示されている。特に、人と人との関係性や自己観といった高次な認知は、暮らしている文化で異なると言われている(例えば、Markus & Kitayama, 1991; Nisbett et al., 2001)。一方で、物体認識やシーンのどの部分に注意を向けるかなど、比較的低次な認知は、環境の影響を受けるとする立場と受けないとする立場がある(例えば、Masuda & Nisbett, 2001; Rayner et al., 2007; Ueda & Komiya, 2012)。

これらの研究では2つの地域で同じ実験を行い、異なる結果あるいは同じ結果が得られたかどうかを論拠にしている。しかし、低次な認知における環境の影響は、同じ課題でも研究によって結果が異なるなど、結果が一貫していない。その原因として考えられるのは、用いられる刺激や教示などが、ヒトの知覚や認知を調べる典型的なものに比べて複雑であり、これが再現性を阻害している可能性である。

探索非対称性を用いた検討

そこで我々は、比較的単純な刺激と課題を用いて、注意やモノの見方に環境が与える影響を検討した。実験では、図1に示すような線分の刺激を実験参加者に呈示し、決められたターゲットを探す視覚探索課題を行った。一方の条件では、短い線分の中にある長い線分を、もう一方の条件では、長い線分の中にある短い

線分を探すように教示された。従来の研究では、長い線分のほうが短い線分に比べて、簡単に見つけられることが知られてい

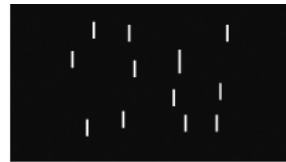
る(Treisman & Gormican, 1988; この効果は探索非対称性と呼ばれる)。

日本人とアメリカ人を対象に実験を行ったところ、アメリカ人では、知られているとおり、長い線分のほうが短い線分に比べて早く正確に探索できた。しかし、日本人では、このような探索非対称性は見られなかった。再現性を確認するために、日本人の別の実験参加者とカナダ人を対象に同じ実験を行ったところ、カナダ人の実験参加者ではアメリカ人と同様に探索非対称性が見られたが、日本人の実験参加者ではこの効果は見られなかった。

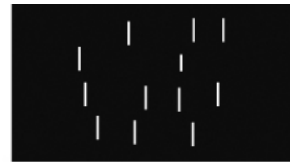
一般性を確認するために、探索非対称性が見られる他の刺激を用いて再度実験を行った(Oの中にあるQの探索とQの中にあるOの探索の比較、垂直線の中にある斜め線の探索と斜め線の中にある垂直線の探索の比較。いずれも前者のほうが容易に探索できる)。その結果、OとQの探索では、長い線分と短い線分の探索と同じく、北米人で日本人よりも大きな探索非対称性が見られた。その一方で、垂直線と斜め線の探索では、日本人で北米人よりも大きな探索非対称性が見られた。

環境によって作られるこころ

これらの結果は、文化が常に、「探



長い線分の探索



短い線分の探索

図1 本研究で使用された視覚探索課題のイメージ図

索を得意にさせる」などの一定の影響を与えるのではなく、刺激の種類によって異なった影響を与えることを示唆している。このような違いを生み出す要因の1つに、用いている文字体系が考えられる。例えば、日本人が使用する平仮名や漢字には「い」と「り」や「土」と「士」、「は」と「ほ」などのように長さや要素の有無で文字が変化することが多い。一方で、アルファベットでは「H」と「N」や「u」と「v」、筆記体の「a」と「o」のように線の角度で文字が変化するものが多い。これらを効率よく正確に見抜く必要がある環境にいることが、幾何学図形の知覚にも影響を与えているのかもしれない。

これ以外にも筆者は、ある刺激群への暴露が、実際には一度も目にしたことの無いその刺激群の平均的な特徴への好感度を上昇させることを示している(上田, 2015; Ueda, 2015)。ヒトの知覚や認知、好みなどが周囲のこういった情報から形成されていくのかを調べることによって、私たちの脳がどれくらい柔軟なのか、またどういった環境が私たちの「こころ」を育成していくのかを明らかにすることができる。このような基礎研究は、地域や文化によって使いやすしい機器の設計やデザインの開発、陥りやすいヒューマンエラーの防止策にもつなげることができるだろう。

自分自身の死をここに描くこと

柳澤邦昭 (京都大学こころの未来研究センター特定助教)

Kumiaki YANAGISAWA

はじめに

動物にはいつか、かならず死が訪れる。川の中を泳いでいる魚にも、優雅に空を飛んでいる鳥にも、そして、当然われわれ人にも訪れる。すべての動物に、この死の不可避性の命題が当てはまるものの、認識できるのはおそらく人だけであろう。とりわけ、ほかの動物と違い、人には優れた認知能力が備わっている。それゆえ、人は自分自身の未来に、いずれ、かならず死が訪れること、そして、それは根本的に解決できない事実であることを認識できる。

この死の不可避性の認識は、死への不安をもたらす根源とも考えられるだろう。しかし、われわれが日常生活を送る上で、そのような不安を感じることは少なく、たとえ将来の死について考える状況(葬式など)であったとしても、比較的冷静に考えることも可能である。このような特徴に対し、人は死の不可避性から生じる不安を抑える心理メカニズムを備えているという議論がある。その代表格が自尊心であり、自分自身を価値ある者であると認識することで、ただ死にゆくだけの動物とは違う特別な感覚をもたらし、そのよう

な不安を弱めるという。実際に、これまでの実験研究では、実験参加者に将来の死を想像させた場合、自尊心の低い参加者で不安が高まりやすく、自尊心の高い参加者ではそのような傾向が認められにくいことが報告されている。また、死を想像させた後では、自尊心を高めようとする行動が増加するといった研究報告も得られていることから、自尊心は死の不可避性から生じる不安を弱める重要な役割を担うと考えられる。

自尊心が死の不安を和らげる脳のメカニズム

これまで、実験研究や調査研究など、さまざまな文脈で自尊心に関する膨大な研究成果の蓄積がなされてきたが、脳機能の観点から検討したものは少ない。また、死の不安や死関連刺激に対する認知・情動処理に、自尊心がどのように関わっているのかを検討した脳機能研究は皆無である。そこで、筆者は機能的核磁気共鳴画像法 (functional magnetic resonance imaging; fMRI) を使用し、自尊心が死の不安を和らげる背景にどのような神経基盤が関わっているのかを検討した。とりわけ、実験参加者が死に関連する文字(「殺」など)

や死との関連が弱い文字(「書」など)を処理している際の脳活動に着目し、自尊心の高い参加者と低い参加者で違いがあるかどうかを検討した。その結果、死に関連する文字を処理している際に、自尊

感情の高い者よりも低い者で、ネガティブな情動の生起に関わる扁桃体の活動が高いことが確認された。加えて、自尊心の低い者と比べて、自尊心の高い者では、不安の抑制に関わる右腹外側前頭前野が扁桃体と効果的に相互作用していることが明らかになった(図1)。これらは死に関連する情報を処理する際に、自尊心の高い者では、不安反応を抑制する認知過程が効果的に働くことで、将来の死に対する不安の高まりが抑えられている可能性を示すものである。

今後の展望

心理学で扱う「死」に関する多くの研究は、死の不安や、それに関連した心理的反応に研究が集中しやすく、不安研究の一分野として解釈されやすい。しかし、古代ローマの詩人ホラティウスが、死を題材に人生のはかなさと、その時々を楽しむ賢明さを歌うように、死は本質的に生や時間の有限性を意識させるといった重要な側面を持つ。実際に、これまでの研究でも、死を意識することで、時間が限られた資源であるという認識や、時間の尊さへの感謝が生じるという主張がある。このような認識から、人はいまの大切さを知ることができ、いかに生きるかについて考える機会を得ることができるだろう。時間的展望の枠組みのなかで、死を意識できることの意味について、行動レベルと神経レベルの両側面から明らかにすることが、今後の「死」に関する研究において重要な課題の1つであると考えられる。

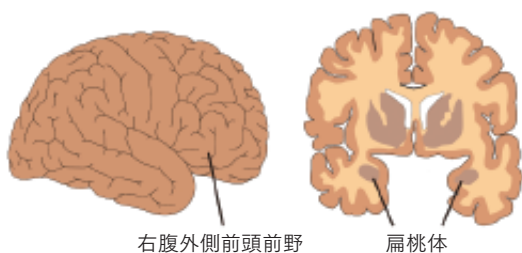


図1 死の不安の処理に関わる右腹外側前頭前野と扁桃体

●2015年4月1日 乾敏郎特任教授、佐伯啓思特任教授が着任。門前斐紀(上廣こころ学研究部門)、浅野孝平、柳澤邦昭、寺尾真紀が研究員に着任(柳澤邦昭は2015年7月に特定助教に昇任)。

●4月1日 第12回ブータン研究会(於:稲盛財団記念館225会議室)、発表1:「学生という立場から見たブータン訪問」谷悠一郎(京都大学農学部修士2回生)、発表2:「サムテガンBHUにおける滞在報告」岸晃生(京都大学医学部2回生)。企画:熊谷誠慈。

●4月9日 第35回身心変容技法研究会一般公開講座(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。基調講演「丹道峨眉気功と身心変容のワザ」講師:張明亮(北京黄亭中医薬研究院院長・中国峨眉丹道医薬養生学派第十四代伝人)、ワークショップ「丹道峨眉気功の実践」、対談、総合討論、司会:鎌田東二。参加人数:約200名。

●4月14日 京都こころ会議(Kyoto Kokoro Initiative)発足に係る調印式・記者発表(於:京都大学百周年時計台記念館迎賓室)。(1)出席者:(公益財団法人稲盛財団)稲盛和夫理事長、稲盛豊実専務理事、檜物省一事務局長、姫田和仁事務局次長、(京都大学)山極壽一総長、吉川左紀子、河合俊雄、(2)趣旨説明:吉川左紀子、(3)挨拶:稲盛理事長、(4)寄附同意書の締結:稲盛理事長、山極総長。

●5月14日 第36回身心変容技法研究会+ワザ学・こころ観合同研究会(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。発表1:「未来医療と身心変容技法」稲葉俊郎(東京大学医学研究科助教・医師)、発表2:「統合医療と身心変容技法」林紀行(大阪大学医学研究科助教・医師)、報告:「MRIを用いた統合医療の解明についての中間報告」藤守創(パリ第一大学ソルボンヌ哲学科・神戸大学大学院医学研究科博士課程)、総合討論、司会:鎌田東二。

●5月16日 「くらしの学び庵:孤立防



第35回身心変容技法研究会一般公開講座(2015年4月9日)

止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト[3期第1回](於:風伝館)。主催:京都大学こころの未来研究センター、共催:公益財団法人信頼資本財団。講義:「毎日できる運動で衰え知らず!」青山朋樹(京都大学大学院医学研究科准教授)、意見交換会。企画:清家理。3期受講者数:25名。

●5月27日 「くらしの学び庵:孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト[3期第2回](於:風伝館)。講義:「毎日できる栄養管理で病気知らず!」幣憲一郎(京都大学医学部附属病院疾患栄養治療部副部长)、意見交換会、よろず相談会。企画:清家理。

●6月7日 熊谷誠慈准教授がプレゼンテーションイベント「TEDxKyoto

University」(於:京都大学芝蘭会館山内ホール)に登壇。発表タイトル:「Achieving Happiness through Wisdom(智慧を通じた幸福の実現)」。

●6月10日 「くらしの学び庵:孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト[3期第3回](於:風伝館)。講義:「老化と病気の予防で錆知らず!」荒井秀典(国立長寿医療研究センター副院長)、意見交換会。企画:清家理。

●6月11日 第37回身心変容技法研究会+ワザ学・こころ観合同研究会(於:稲盛財団記念館3階大会議室)。発表1:「木村素衛の教育学における〈技術的身体〉」門前斐紀、発表2:「賀川豊彦の生命進化論における〈物質と精神の双方関係〉」スティグ・リンドバーク(京都大学文学研究科助教)、総合討論、



くらしの学び庵:孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト(2015年6月24日)



第6回東日本大震災関連シンポジウム「こころの再生に向けて——5年目を迎えた被災地の『復興』と現実」(2015年7月9日)

司会：鎌田東二。

●6月24日 「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト〔3期第4回〕」(於：風伝館)。講義：「健やかなこころで暮らす知恵」吉川左紀子、意見交換会、よろず相談会。企画：清家理。

●6月30日 「被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究IV」(於：稲盛財団記念館3階中会議室)。発表1：「2015年5月東北被災地視察報告」鎌田東二、発表2：「石巻プロジェクト報告」山本豊津(東京画廊・代表)、発表3：「『現代京都藝苑2015』総括と今後」秋丸知貴(独立キュレーター)、森裕一(MORI YU GALLERY・代表) 総合討論、発表4：「2015年度の活動内容検討～特に9月の石巻市雄勝町葉山神社再建竣工祭でのアートイベント」秋丸知貴、司会：大西宏志(研究代表者)。

●7月 学術広報誌『こころの未来』第14号を刊行。特集テーマは「里山」。

●7月 第17回日本ヒト脳機能マッピング学会で阿部修士准教授、上田竜平(京都大学大学院文学研究科修士課程)らによるポスター発表が「若手奨励賞」を受賞。

●7月2日 第38回身心変容技法研究会+ワザ学・こころ観合同研究会(於：稲盛財団記念館3階中会議室)。発表1：「多宗教社会の光と影——イギリスとオーストラリアを中心に」蛭川立(明治大学情報コミュニケーション学部准教授)、発表2：「死とともに生きる——

アメリカ仏教とターミナルケア」永澤哲(京都文教大学総合社会学部准教授)、総合討論、司会：鎌田東二。

●7月9日 第6回東日本大震災関連シンポジウム「こころの再生に向けて——5年目を迎えた被災地の『復興』と現実」(於：稲盛財団記念館3階大会議室)。趣旨説明：鎌田東二、基調報告1：「福島、いとあはれなり」玄侑宗久(作家/福聚寺住職)、基調報告2：「被災地に誕生する”祈りの場”」鈴木岩弓(東北大学教授)、基調報告3：「被災地の記憶と震災伝承：気仙沼震災伝承マップの取り組み」稲場圭信(大阪大学准教授)、基調報告4：「津波復興太鼓：マインドフルネスとレジリエンスの視点から」井上ウィマラ(高野山大学教授)、コメンテーター：金子昭(天理大学教授)、黒崎浩行(國學院大学准教授)、司会：鎌田東二。参加人数：約100名。

●7月11日 「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト〔3期第5回〕」(於：風伝館)。講義：「老後の備えって？

アリとキリギリス物語」高岸達哉(京都信用金庫業務部業務課課長)、意見交換会。企画：清家理。

●7月16日 第13回京都大学ブータン研究会(於：稲盛財団記念館225会議室)、発

表：「ブータンにおける農業の変遷と有機農業政策について」小林舞(京都大学大学院地球環境学舎博士後期課程)。企画：熊谷誠慈。

●7月22日 「くらしの学び庵：孤立防止のための互助・自助強化プログラム開発研究プロジェクト〔3期第6回〕」(於：風伝館)。講義：「介護って何？」清家理、意見交換会、よろず相談会。企画：清家理。

●7月23日 第38回身心変容技法研究会+ワザ学・こころ観合同研究会(於：稲盛財団記念館3階小会議室)。発表1：「『ありがとう禅』と『結び』の思想」町田宗鳳(広島大学教授)、発表2：「愛の生理学——オキシトシンと愛」高橋徳(ウィスコンシン医科大学教授・統合医療クリニック高橋医院院長)、発表3：「身心変容技法と共同性の関わり」島菌進(上智大学グリーンケア研究所所長)、総合討論、司会：鎌田東二。

●8月4日 滋賀県立水口東高校生19名と教諭10名がセンターを訪問し、吉川左紀子センター長のレクチャーとワークショップに参加(アドヴァイザー：上田祥行助教、藏口佳奈研究員、嶺本和沙教務補佐員)。

●8月4日 福岡県立明善高校生19名と教諭2名がセンターを訪問。鎌田東二教授、阿部修士准教授によるレクチャーを受講し、連携MRI研究施設を見学。

●8月7日 広島女学院中学高等学校生9名と教諭4名がセンターを訪問。センター内を見学し、内田由紀子准教授と交流。

●9月 北山忍特任教授、阿部修士准



福岡県立明善高校生と教諭のセンター訪問(2015年8月4日)

教授が平成27年度日本心理学会国際賞を受賞、内田由紀子准教授が平成27年度日本心理学会優秀論文賞を受賞。

●9月1日・2日 「fMRI体験セミナー2015」(於：こころの未来研究センター連携MRI研究施設南部総合研究1号館地階MRI実験室)。レクチャー・実験指導、講師：阿部修士、上田祥行、柳澤邦昭、浅野孝平。参加人数：12名。

●9月5日 支える人の学びの場 ところ塾2015仙台「発達障害の理解と支援：先端の知と実践をつなぐ」(於：東北大学片平さくらホール)、挨拶：吉川左紀子、講演：「自閉症の発症機序と共感障害の脳内機構」乾敏郎(センター特任教授・追手門学院大学心理学部教授)、講演：「サル真似を超えて——ヒトの社会性認知の発達基盤」明和政子(京都大学教育学研究科教授)、事例報告と討議：嶋谷和之(大阪市更生療育センター作業療法士)、加藤寿宏(京都大学医学研究科准教授)、松島佳苗(同助教)、乾敏郎、明和政子、司会：吉川左紀子。参加人数：62名。

●9月13日 第1回京都こころ会議シンポジウム「こころと歴史性」(於：京都ホテルオークラ3階翠雲)、主催：京都大学こころの未来研究センター、後援：公益財団法人稲盛財団。開会の言葉：吉川左紀子、挨拶：稲盛和夫(公益財団法人稲盛財団理事長)、祝辞：牛尾則文(文部科学省研究振興局学術機関課長)、講演1：「こころの構造と歴史」中沢新一(明治大学野生の科学研究所所長)、講演2：「こころの歴史的內面化とインターフェイス」河合俊雄、講演



第1回京都こころ会議シンポジウム「こころと歴史性」(2015年9月13日)

3：「ポスト成長時代の「こころ」と社会構想」広井良典(千葉大学法政経学部教授)、講演4：「こころの潜在過程と”来歴”——知覚、進化、社会脳」下條信輔(カリフォルニア工科大学生物・生物工学部教授、センター特任教授)、講演5：「こころの起源——共感から倫理へ」山極壽一(京都大学総長)、総合討論、総括：鎌田東二、閉会の言葉：湊長博(京都大学理事)。参加人数：約400名。

●9月20日 第8回ひと・健康・未来シンポジウム2015京都「40代からの学び：社会と家庭のリーダーとして、自分たちのこころとからだを知る」(於：稲盛財団記念館3階大会議室)、主催：公益財団法人ひと・健康・未来研究財団、後援：京都大学こころの未来研究センター。開会挨拶：吉川左紀子、講演1：「更年期、ちょっと立ち止まる大切なとき」江川美保(京都大学医学部附属病院産科婦人科特定助教)、講演2：「明日も

元気にすこやか漢方」谷川聖明(谷川醫院院長)、講演3：「子どもも高齢者も支える40代からの健康——音楽はこころとからだのサポーター」三宅聖子(渋谷区障害者福祉センターはあとびあ原

宿施設長)、講演4+実演：「壮年期の運動機能を知り、そして高める戦略——ピラティスメソッド」青山朋樹(京都大学医学研究科人間健康科学系専攻准教授)、石原美香(ピラティスボディワークスタジオヴォール主宰)、質疑とディスカッション、司会：吉川左紀子、閉会挨拶：塩田浩平(滋賀医科大学学長/京都大学名誉教授)。参加人数：102名。

●9月30日 第14回ブータン研究会+国際交流科目でのブータン訪問者の訪問報告会(於：稲盛財団記念館3階中会議室)、〔2014年度報告〕全体概要報告：諏訪雄一(京都大学文学部3回生)、発表1：「東ブータンの自然環境」森田諒也(同農学部3回生)、発表2：「ブータンの伝統・文化」柳原志穂(同文学部3回生)、発表3：「ブータンで見た教育」福田睦(同総合人間学部2回生)、〔2015年度報告〕全体概要報告：犬飼亜実(同農学部3回生)、発表4：「大切なのは心」浅井薫(同総合人間学部1回生)、発表5：「ブータンの展望と学生、そして日本」田中咲妃(同総合人間学部2回生)、発表6：「命を扱う専門家ブータンのお医者さんとお薬屋さん」出屋敷綾音(同薬学部薬学科5回生)、コメント：米田実紀(同農学部4回生)、森藤彬仁(同医学部4回生)。企画：熊谷誠慈。

●9月30日 「こころの思想塾：現代の経済・経営を考える第1回/全5回」(稲盛財団記念館3階大会議室)、講師：佐伯啓思。参加人数：22名。



fMRI体験セミナー2015(2015年9月1日・2日)

編集後記

予定よりもだいぶ遅くなってしまいましたが、『こころの未来』第15号をお届けします。巻頭の座談会は、それぞれの研究者の個性満開でした。ふだんの気楽なやりとりとはひと味異なる若手スタッフの闊達な発言に、改めてセンターが生み出す「こころ学」の豊かさを感じています。

(吉川左紀子)

こころの未来研究センターでの任期も残りわずかになりました。この8年間、まさにもっとも躍動的な創成期の「こころの未来」と「こころ学創生」に関わる研究スタッフの一員として参画できたことを、心から光栄かつ有難く思います。この間、お世話になってきた先生方、同僚・スタッフの皆様方、本当にありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。

(鎌田東二)

「こころ学創生」という野心的なテーマを掲げた本特集号は、こころに挑んできた各執筆者のさまざまな思いが込められている。その専門性の多様さゆえに、こころに対するアプローチも多岐にわたっている。読者の皆様には是非、全体に目を通してほしい。そうすることで、こころの研究の面白さ、難しさ、奥深さを感じ取っていただけるものと思う。(阿部修士)

本号のテーマは「こころ学創生」。センター教員それぞれが自らの研究を総括したうえで、再スタートを切る絶好の機会になったように思います。また、本号冒頭の座談会を通じ、センター全体として「こころ学とは何か」という問いを改めて問い直す機会ともなりました。本センターにおける学際的なこころ学研究的現状と展望について、是非ともご一読いただければ幸いです。

(熊谷誠慈)

本号の巻頭論文は山極壽一京都大学総長にご執筆いただきました。ゴリラと2時間近く抱き合ったお話にこころが温まり、ヒトのこころを捉えることのむずかしさも痛感しました。ありがとうございました。本号は「こころ学」がいかに誕生したかを記録した貴重な雑誌になると思います。近々、「こころ学」をテーマにした本も刊行されますので、あわせてお読みいただければ幸いです。

(原章)

こころの未来

KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

第15号

発行日 2016年3月31日

発行 京都大学こころの未来研究センター
〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46 京都大学稲盛財団記念館内
電話 075-753-9670 FAX 075-753-9680
<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/>

編集委員 吉川左紀子 + 鎌田東二 + 阿部修士 + 熊谷誠慈

表紙写真 赤阪友昭「つむじ倉の滝」(撮影地:福島県河沼郡柳津町)

編集・制作 編集工房レイヴン 原章

デザイン 鷺草デザイン事務所 尾崎閑也 + 東浩美

印刷 株式会社NPCコーポレーション